匹見町埋蔵文化財調査報告書第34集

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

山根ノ下遺跡

2001年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告書第34集

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

山根ノ下遺跡

2001年3月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1．本書は，島根県益田農林振興センターの委託を受けて，匹見町教育委員会が平成12年度に行った益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う，山根ノ下遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会	
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺　友千代
	匹見町教育委員会主任主事	山本　浩之
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田　美文
遺物整理員		大賀　幸恵　大谷　真弓
調査指導	島根県教育委員会文化財課	
	広島県立美術館学芸課長	村上　勇
事務局	匹見町教育委員会教育長	寺戸　等（平成12年９月30日まで）
		松本　隆敏（平成12年10月３日まで）
	匹見町教育委員会次長	大谷　良樹
発掘作業員	栗田　勉　栗田　修　村上　強　村上　稔	
	森脇　雅夫　中間昭二郎　岡本　三生	

3．調査に際しては，島根県益田農林振興センターの池田技師をはじめ，島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただいた。また，広島県立美術館の村上勇学芸課長から一方ならぬご教示を得るとともに，飛鳥資料館の杉山洋研究官には出土した和鏡について見解をいただくとともに，細田美樹氏からもご協力を得ることができた。

なお，発掘現場においては土地所有者をはじめ，地元の方々に終始多大なご協力を得て，ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4．今回の調査において，柱穴遺構－Ｐ，土坑状遺構－ＳＫと略号している。なお，現場あるいは編集に掲示した現地図面は，美濃郡匹見町土地改良区の協力を得た１／1000の縮尺ものであり，また位置図などは縮尺１／25000を使用したものである。

5．編集にあたっては，前掲の調査員・調査補助員及び遺物整理員らの協力を得て，執筆・編集は渡辺・栗田がともに行ったものである。

目　　次

第１章　発掘調査に至る経緯と経過 ……(渡辺友千代) …… 1
第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
第２節　発掘調査の経過 …… 1

第２章　調査地区の環境 ……(渡辺友千代) …… 2
第１節　地形的立地 …… 2
第２節　歴史的立地 …… 2

第３章　調　査　概　要 ……(栗田　美文) …… 4
第１節　はじめに …… 4
第２節　調査区の設定 …… 4
第３節　層序と層位 …… 6
第４節　遺　　構 …… 9
１．はじめに …… 9
２．検出遺構 …… 13

第４章　出　土　遺　物 ……(渡辺友千代) …… 18
第１節　はじめに …… 18
第２節　出土・採集遺物のようす …… 18
第３節　実測遺物 …… 20
１．縄文遺物 …… 20
２．中世遺物 …… 21

第５章　小　　括 ……(渡辺友千代) …… 27

挿図・図表目次

第１図　調査地点位置図…… 1
第２図　山根ノ下遺跡と周辺の遺跡位置図…… 2
第３図　地形断面図…… 4
第４図　調査区配置図…… 5
第５図　配置地区名図…… 6
第６図　土層堆積状況図（1）…… 7
第７図　土層堆積状況図（2）…… 8
第８図　遺構指示図 …… 10
第９図　遺構陥入状況図（1） …… 13
第10図　遺構陥入状況図（2） …… 13
第11図　遺構陥入状況図（3） …… 14
第12図　遺構陥入状況図（4） …… 14
第13図　遺構陥入状況図（5） …… 15
第14図　遺　構　図 …… 16
第15図　縄文遺物実測図 …… 19
第16図　土師質実測図 …… 20
第17図　瓦質実測図 …… 21
第18図　瓦質・須恵質・土錘実測図 …… 22
第19図　陶磁器類実測図 …… 23
第20図　和鏡・鉄剣・口金実測図 …… 25
第21図　石臼実測図 …… 26

第１表　遺構計測表 …… 11～12
第２表　遺物集計表 …… 18

図　版　目　次

図版１　鳥瞰する遺跡と周辺部

図版２

１．北側からみた遺跡の全景
２．匹見川から捉えた遺跡の全景(南東から)
３．北側からみた十字トレンチの発掘風景
４．A調査区の西壁（南東から）
５．A調査区の状況と北壁（南西から）
６．B調査区の北東壁（南から）
７．C調査区の東壁（北西から）
８．D調査区の南西・西壁（南東から）

図版３

１．土師器の出土状況
２．足鍋の出土状況
３．陶磁器の出土状況
４．打製石斧の出土状況
５．A調査区の遺構表出状況（北から）
６．焼土の顕著なSK02の表出状況(北から)
７．SK12の表出状況（北から）
８．SK13の表出状況（南から）

図版４

１．SK20の表出状況（北から）
２．B調査区の遺構表出状況（南から）
３．C調査区の遺構表出状況（北西から）
４．SK44・SK45の表出状況（北から）
５．SK48の表出状況（北東から）
６．SK50の表出状況（西から）
７．D調査区の遺構表出状況（北から）
８．SK58の表出状況（北から）

図版５

１．SK10の半截状況（北西から）
２．SK13の半截状況（北から）
３．SK16の半截状況（北から）
４．SK20に検出された焼石（北から）
５．SK28・SK29の半截状況（北から）
６．P68・P69の検出状況（北から）
７．SK48の半截状況（南東から）
８．SK50の半截状況（北西から）

図版６

１．P96の検出状況（西から）
２．SK58の半截状況（南東から）
３．SK62の半截状況（西から）
４．A調査区の遺構完掘状況（南から）
５．北からみたA・B・C・D調査区の遺構完掘状況

図版７

１．鉄剣の出土状況
２．和鏡の出土状況
３．縄文土器・土師質類
４．土師・瓦質・須恵質器類
５．土錘・陶磁器類

図版８

１．石　器　類
２．金 属 器 類
３．鉄剣のX線写真

第１章　発掘調査に至る経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

本遺跡（山根ノ下遺跡）の発掘調査は，平成12年度から始動した益美地区中山間地域総合整備事業に伴って発生したものである。

よって，平成12年度には対象地であった澄川地区の持三郎を中心に，５地点を選定して分布調査を実施したのであった〔註１〕。その結果，該地点では数点の陶磁器・鉄滓，そして１点の打製石斧が出土したことから遺跡であることが判明したのである。したがって匹見町教育委員会は，事業主体者側である益田農林振興センター宛に平成12年３月13日付で，その状況および文化財保護の必要を通知したのであった。

本事業にかかる協議は，主体者である益田農林振興センター，および委託者側である匹見町教育委員会の関係者が出席して平成12年５月11日に行った。その結果，整備工法上已をえない部分のみを調査することを了承し，同年５月18日には両者と委託契約を結んだのである。そして発掘調査の届出は平成12年５月29日付で送附し，事前の諸手続を終えたのであった。

第１図　位　置　図

第２節　発掘調査の経過

現地調査は平成12年５月22日から実施したが，調査を進めていくにつれ，頭初，想像していた縄文遺跡とは異なり，その主体は中世期のものであることが次第にわかってきたのであった。

該期の遺構に位置付けられるものも多く検出され，青磁・白磁などの外来陶磁器，鉄剣などの出土からは本住居者が唯者ではなく，本地域における支配階級者ではなかったかと想像させたのである。そして和鏡の出土は，暑い季節の最中，調査員は勿論のこと作業員に更なるファイトを噴出させた思い出深い遺物でもあった。

なお，現地調査は同年８月末には無事に終え，平成13年２月５日には特に陶磁器類を中心に，広島県立美術館の村上勇学芸課長に分類及び指導を得たのであった。（渡辺友千代）

〔註１〕『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅻ』（第30集）匹見町教育委員会2000年３月

第２章　調査地区の環境

第１節　地形的立地

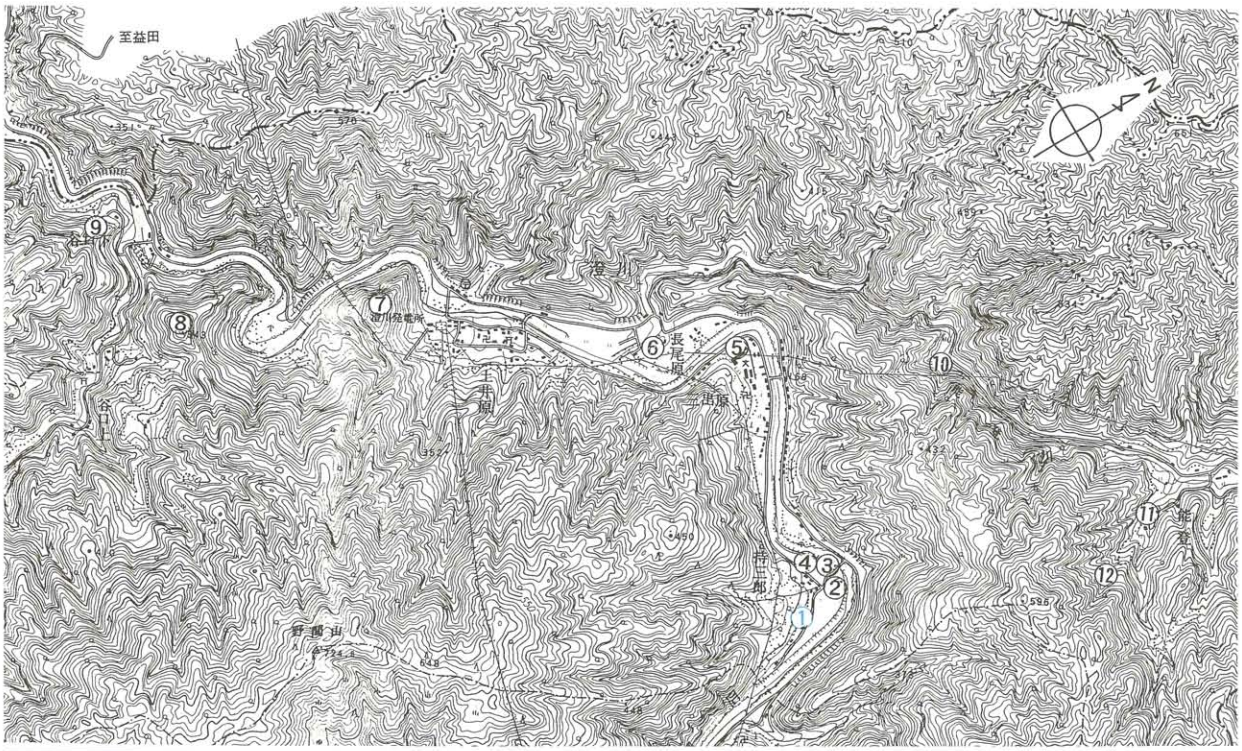
該当地は，町域の北部に位置する島根県美濃郡匹見町大字澄川のうちの，持三郎（もっさぶろう）という小字単位を中心とした小地区である。

そこは南西側の山地が舌状を成して派生しており，匹見川はその端部を比高差約4・5ｍを測って，大きく蛇行して北西流している。また平坦を成す可耕地は，標高170～176ｍを測り，大半は水田として拓かれており，また山裾側を中心に10軒ばかりの民家が点在する。そして，その上段部は標高約192ｍ台を測って一部平坦地がみられ，そこは畑地と化され，つまり2段からなる河岸段丘に形成されているという景観に立地する（第１・２図・図版１）。

第２節　歴史的立地

本地区における周知の遺跡は，慶長年間（1596～1615）から大正５年まで在存したと伝えられる「長蓮寺跡」（第２図）のみで，原始・古代遺跡は勿論のこと，他にも顕著な歴史的痕跡のものはない。

今のところ史料的初見は，永和２年（1376）に成るという「益田本郷御年貢并田数目録帳」および



① 山根ノ下遺跡	② 長 蓮 寺 跡	③ 舟 戸 遺 跡	④ 小田原遺跡
⑤ 田屋ノ原遺跡	⑥ 嶽　城　跡	⑦ 叶 松 城 跡	⑧ 金 山 城 跡
⑨ 城 平 城 跡	⑩ 丸 渕 炉 跡	⑪ 火ノ口鉾跡	⑫ コンボリ遺跡

第２図　山根ノ下遺跡と周辺の遺跡位置図

「益田本郷田数注文」〔註１〕に，本地区を指すと想定できる「墨河・物三郎分」が確認される。

ただ本史料では物三郎が用いられており，現在の持三郎とは異なっているものの，墨河（澄川）と連名されていることからみて，それは本地区を指しているものとして判断してよいだろう。このことから南北朝において，既に益田氏によって奥十二畠地域として，最上流域に当たる本地区が支配されていたらしいことが判るのであるが，明確な本百姓層の名主制によって成立していたものかは確かではない。物三郎という耕地名に「分」が附けられていることから，それは山間地という僻地，しかも狭小地という立地性からみて，恐らく準名主（小百姓層）級の間人（もうと）層であっただろうと考えられるのである。ただし澄川とする本地区内は，該当期には斎藤氏から分流したと考えられる澄川氏が居住していたことが確かであることから，同氏族が本百姓級としての名主制を確立していた可能性も残していると考えられるのである。

なお，地内の中塚には明治期まで存在したといわれる組神としての大元社跡があり，また匹見川河畔のハツ表の岩頭には小祠があったといわれ，鎌倉期の大水害によって流失したという伝承が残っている。そして，そこには対岸の山地から崩落した大岩も見られ，その時に７人の早乙女が落命したともいわれ，興味ある民俗譚も伝えられている。（渡辺友千代）

〔註１〕井上寛司・岡崎三郎編集『史料集益田兼見とその時代－益田家文書の語る中世の益田(1)－』1996年2月発行

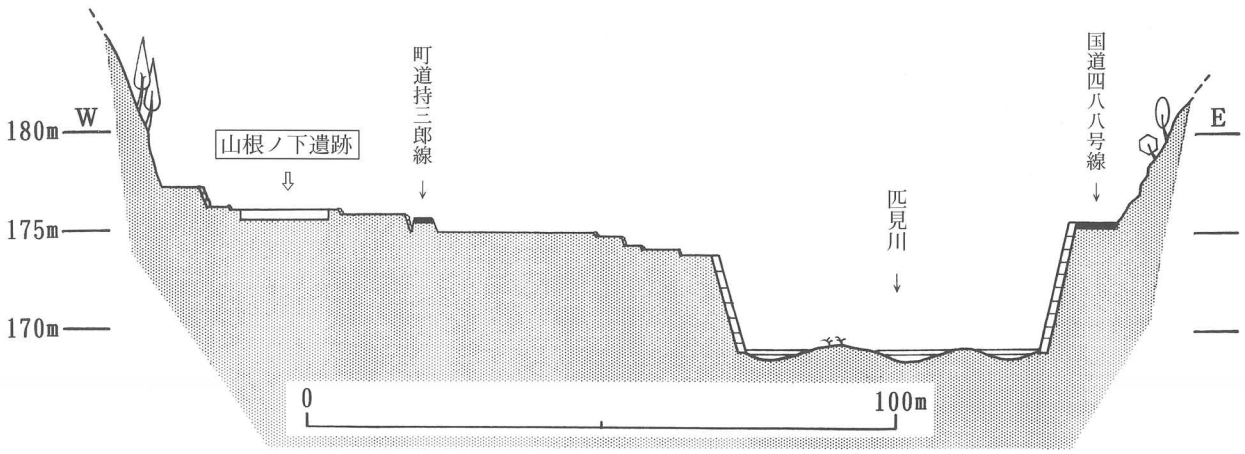
第3章　調 査 の 概 要

第1節　はじめに

本遺跡は，匹見町大字澄川イ80番地ほかに所在し，そこの山根ノ下（やまねのした）の字名をもって遺跡と命名することにした（第1・2図・図版1）。

該当地は，澄川地区の南東側にあって，狭長な谷平地が部分的に存在するうちの最も上流域の，比高差約5mを測る左岸に立地する。狭長な河岸段丘が発達する本遺跡周辺は，水田が拡がり，その段丘を貫道する町道澄川支線沿いには民家が点在し，そして上流側に位置する現地の標高は約170～178mを測る。また，対岸の山裾には匹見川に沿って国道488号線が走り，下流に至っては益田市，上流に向かっては匹見中央部に通じている（第3図・図版2－1・2－2）。

平成11年度の12月上旬～1月中旬に行った分布調査では，段丘のやや高位に当たる山裾側寄りに形成された2筆の水田に，2m×2mの方形区を各1箇所設けて調査を行った。このうち下流寄りの北側の調査区（A区）から1点の打製石斧が出土したことによって，至近に本命と想定される遺跡があると判断されたのであった。したがって本格調査は，その地点から隣接するやや低位であった北西側（下流寄り）の水田域に新たなトレンチを設け，その状況を把握することからはじめたのであった（図版2－3）。

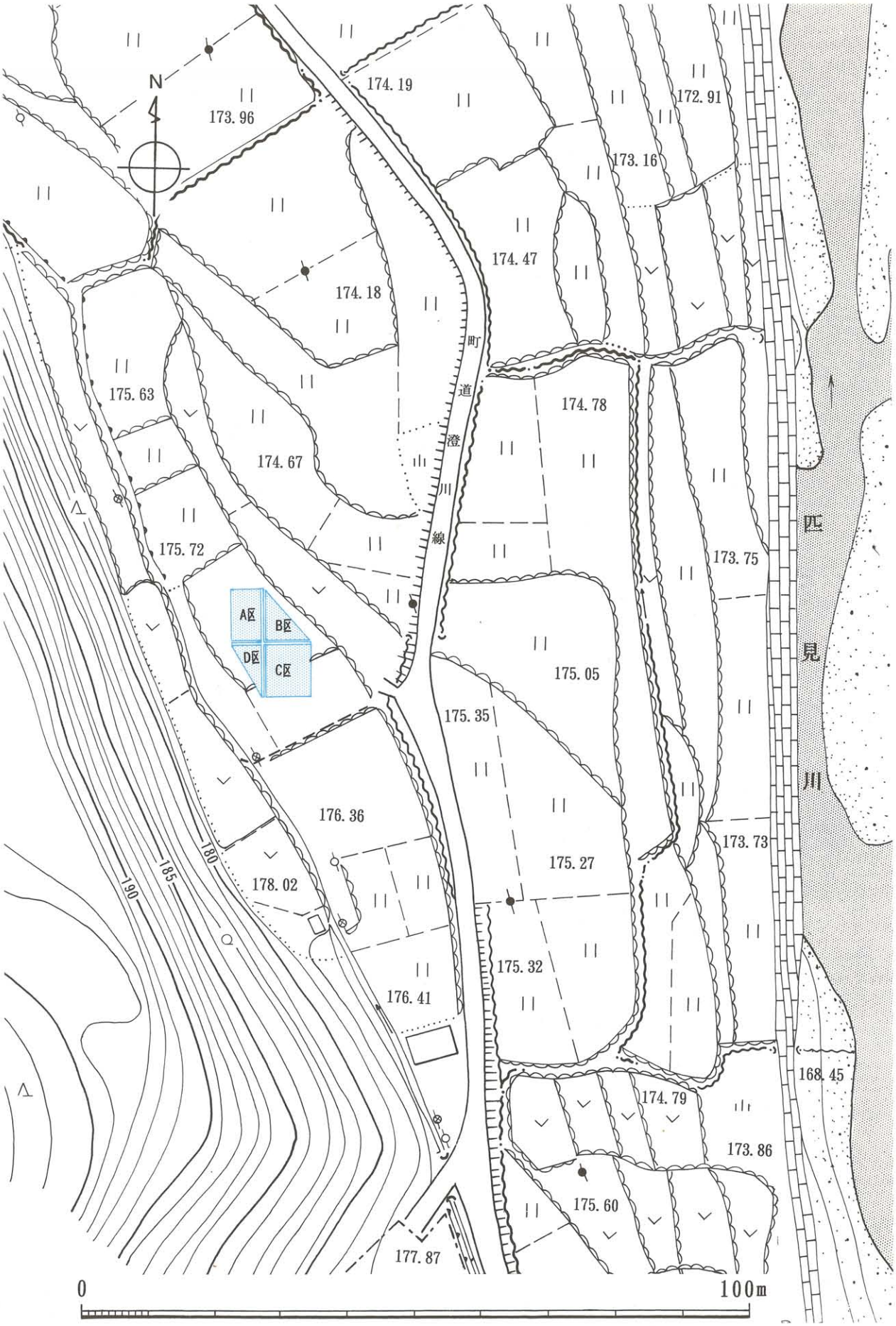


第3図　地形断面図

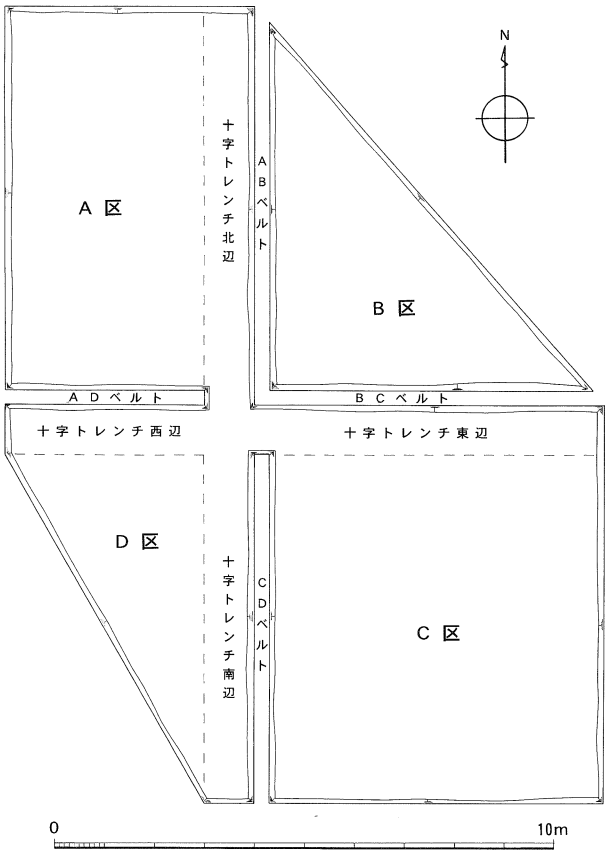
第2節　調査区の設定

調査区設定にあたっては，基本となる基準杭を定めることから始めることにした。その基点は，分布調査でA区を設けた水田の北西側に隣接する表面標高176.12mを測る水田（約250㎡）の南東寄りに任意に定めたのであった。

そしてその基点をもとに，南－北方向に各8m測って北・南杭を定めて，西側に向かって幅1mのトレンチをまず設けたのである。一方，東－西方向には，基点から東方向に7m測って東杭を，そして西方向に5m測った地点に西杭を定め，南側に向かっては同幅のものを設けたのである。これら設定


N
173.96
174.19
172.91
173.16
174.47
174.18
175.63
174.67
174.78
175.72
173.75
A区
B区
D区
C区
175.05
175.35
176.36
175.27
178.02
173.73
175.32
176.41
168.45
174.79
173.86
175.60
177.87
180
185
190
町道澄川線
匹見川
0
100m

第４図　調査区配置図



第５図　配置地区名図

したトレンチは，凡そ区形が十字状を呈しているので，十字トレンチと呼称することにした。調査は，この十字トレンチから層序または遺物の分布状況などを把握するために，まず掘削を開始することにしたのである。その結果，３層上面から炭化物・焼土痕などが確認され，また土師器などの遺物が多量に出土したため，そこで十字トレンチを拡張して調査区を設けることにした。

まず北辺側を拡張するため，北坑を起点に西側に向かって５ｍ測って，北西杭を設け西杭と結んだ。また東側に向かっては，北東面を斜行する石垣築地に余地をのこして，起点から東杭を結んだのである。一方，南辺側は，東杭から南側に向かって８ｍ測って南東杭を設け，南杭に延ばし，そして南西面を仕切る石垣築地を考慮しながら，十字トレンチの南－西辺端部を直線で結ぶといった変則な遣り方をしたのである（第４図）。

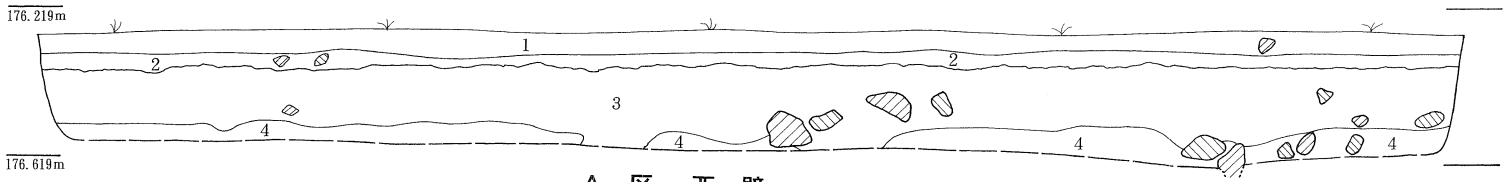
そうした，やや亀甲文状を呈した調査区内（総面積152㎡）には，南－北・東－西方向に幅30㎝セクションベルトを設けて４分割とした。これら４区画したものは，アルファベトの大文字を用いて，北西側の山寄りの区をAとし，そして右回りの方向順にB・C・D区と呼称することにしたのであった（第５図）。

第３節　層序と層位

本遺跡における基本的層序は，灰褐色粘質土（耕作土），２層橙褐色土（酸化鉄層），３層灰～暗褐色土，４層黄灰色砂質土の順で堆積していた（第６・７図・図版２－４～２－８）。

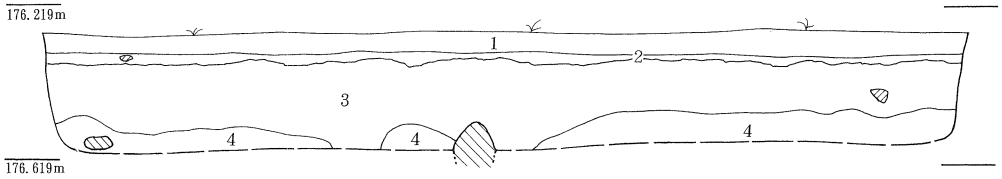
各地区においても基本的には上述のように堆積しているが，調査区の北・南半部では基本層位とは異なった部分もみられたのである。とくに南半部のやや高位なC区南半域では３層灰～暗褐色土が層薄で，土質・色調的にみても３層下位部の暗褐色土系であるといった状況から，本地点周辺が水田造成等によって，上位部に深度の高い削平が成されたものと推察される（第７図・図版２－７）。一方，北半部では基盤層が北東方向に下がっていくにつれ，その３層は厚くなって堆積しているのであった。以下，基本的層序にしたがい上位から下位へと，その状況をみていくことにする。

そのうちの１層の水田耕作土は，粘質性をもった灰褐色土であった。その層厚は10～16㎝を測り，総体的にみて，B区を設置した北東方向に向かって厚く堆積する。これは原地形を呈したと想定される斜度に関係したものと考えられる。つぎの２層は，酸化鉄が含浸した橙褐色土。下位層の灰～暗褐色土とは色調から分層しているが，実質的には下位層の３層と類似したものと捉えられる層状を呈していた。つまり３層灰～暗褐色土に，酸化鉄が上位部に含浸したものと想定されるのである。層厚は，

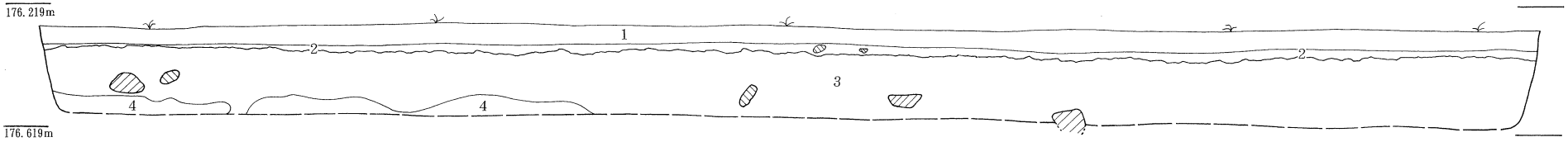


A 区 西 壁

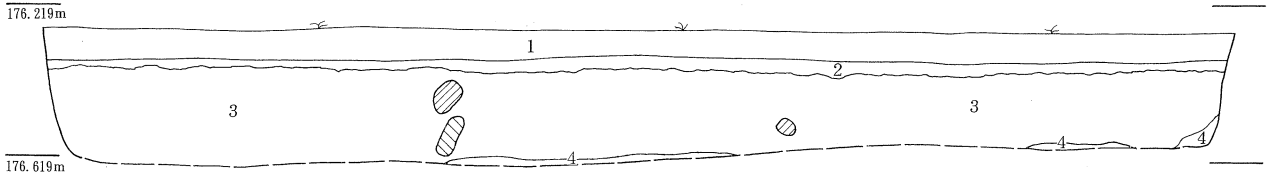
1層 灰褐色粘質土（耕作土）
2層 橙褐色土（酸化鉄層）
3層 灰～暗褐色土（10～30㎝大の礫を含む）
4層 黄灰色砂質土（小礫を含む）



A 区 北 壁

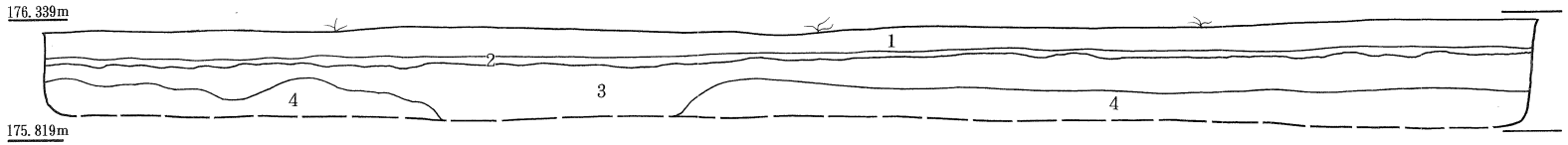


B 区 北東壁

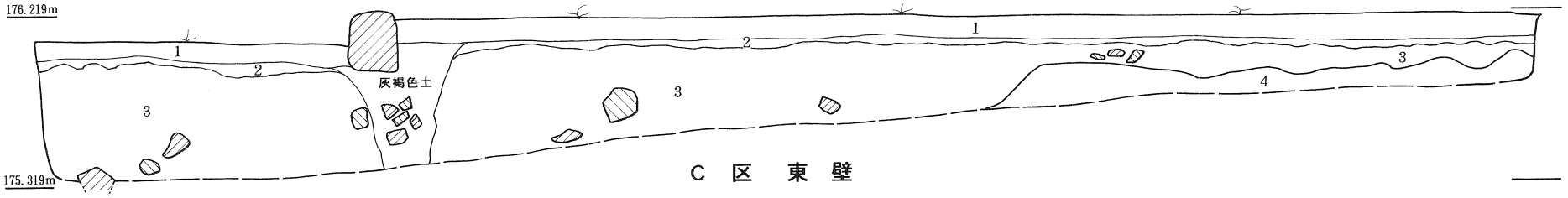


B 区 南 壁

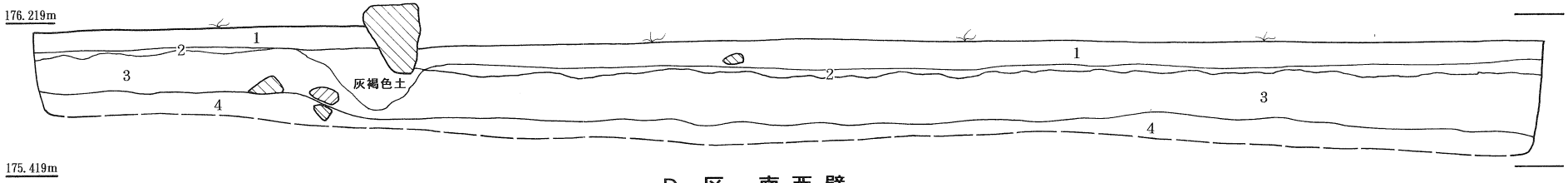
第6図 土層堆積状況図（1）



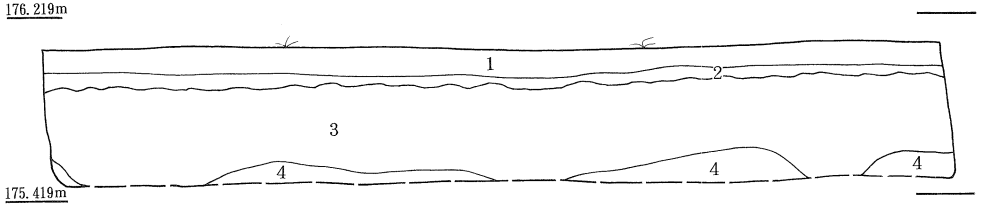
C 区 南 壁



C 区 東 壁



D 区 南西壁



D 区 北 壁

1層　灰褐色粘質土（耕作土）
2層　橙褐色土（酸化鉄層）
3層　灰～暗褐色土（10～30㎝大の礫を含む）
4層　黄灰色砂質土（小礫を含む）

第７図　土層堆積状況図（2）

3～8ｍを測って，厚薄差がみられた。なお本層までの層序には，とくにB・C区を中心とした東半部辺に土師器片などの中世遺物が出土し，また，おそらく搬入したと思われる2点の縄文遺物（打製石斧片）も混在していた（第2表）。

10～30㎝大の角礫を含む灰～暗褐色土の3層は，基盤層が上昇する南側（上流側）が約6～16㎝を測って薄く，その逆に，北側（下流側）に向かって層厚約60㎝を測って厚く堆積していたのである（第6・7図）。これらの堆積状況から，とくに南半側のC調査区周辺において深度に至る削平が行われたものと考えられる。

したがって，本来は原地形に沿ってある程度の堆積高があったものと想像されるのである。なお本層の上～中位部にかけて多量の炭化物・焼土痕がみられ，また土師器などを中心とした約1300点余りの中世期のものが出土した（図版3－1～3－3）。そしてその下位部（C・D区域）からは土器片・石器類などの縄文期のものがまとまりの無い状態で数点ほど検出された（第2表・図版3－4）。そして遺構は，4層との層界にみられたが，混在するといった遺物出土状況からみて，2つの文化層が形成されていたものと捉えられる。しかし遺構については同一層内ということもあってか，同位部では把握することはできなかったのである。ただしC・D区の南半側で検出された遺構には，下位部の暗褐色系の土質のものが陥入していることや，共伴遺物などからみて縄文期のものと想像している。

河床礫と想定される6層は，黄灰色をした砂質土である。しかし砂質土といっても，北・南半部の端部に露出した上位部をみるかぎり，20㎝大の円礫を含んでおり，実質的には河床礫層といえるものであり，本遺跡の基盤層にあたるものということができよう。

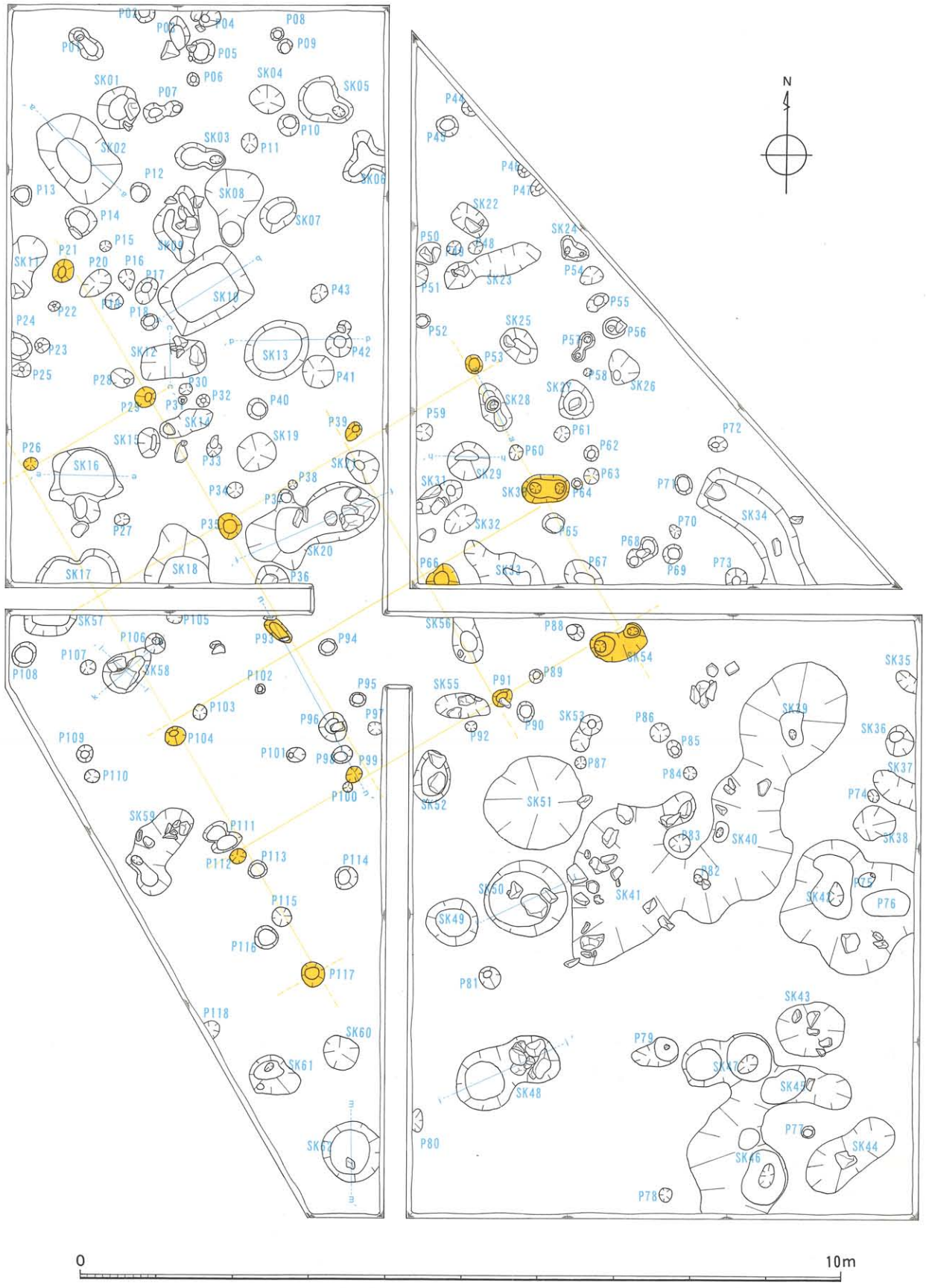
第4節　遺　　構

1．はじめに

本遺跡では，3層の灰～暗褐色土が遺物・遺構の包含・構築層であったということができる。これらのうち遺物においては，上～中位部に土師器などを中心とした千数百点余りの中世期のものが，そして下位部には少量の縄文土器・打製石斧などが出土している。また遺構においては，そのほとんどが上・中位の中世遺物に伴うと想定できるものであったが，しかし基盤層が上昇する南半の端部には，縄文期に伴うものと思われるものが，一部みられたのである。本項ではこの両期の遺構を中心として，以下記述することにする。

そのうちの中世期のものと想定される遺構は，3層灰～暗褐色土と4層黄灰色砂質土との層界で確認された。それらの遺構の大半には，文化層として捉えた3層のうちでも炭化物が多量に混在する灰色土系，そしてブロック状の4層が嵌入していることから，構築面は3層の上・中位に存在していた可能性が考えられる。また，縄文期のものも同層界で検出されたものであるが，それらには灰～暗褐色土の中でも濃厚な下位部の土質が陥入していた。また，それらに共伴する遺物などから考えると，明確に断定はできないが，その構築面は3層下位部にあったと理解している。

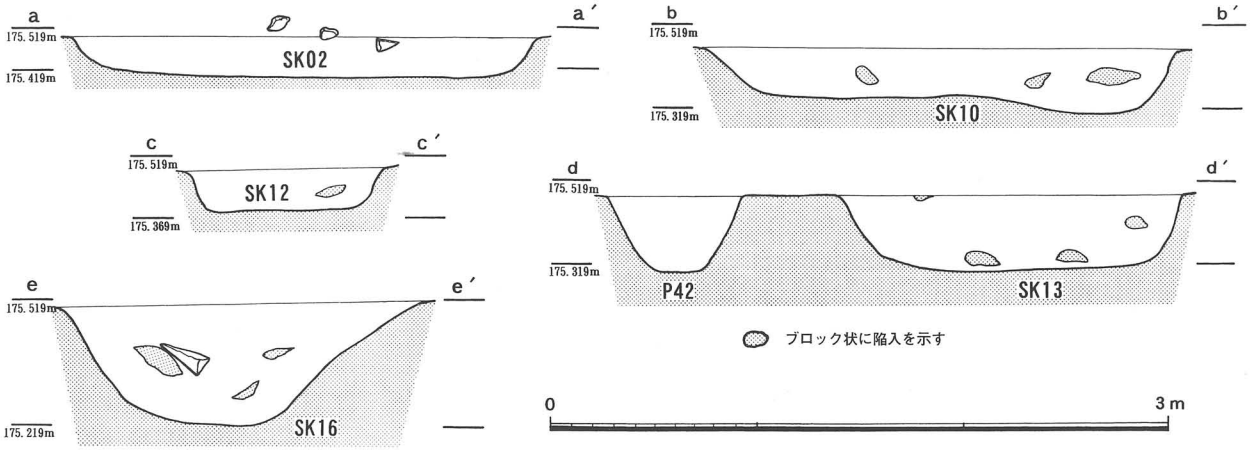
これら多半の遺構は，4層に陥入して検出されるため，その坑底部などは把握できたものの，構築上位部がはっきりしないのが現状であったのである。そして遺構をみるかぎり，そこには時期幅が捉られるが，遺構との遺物共伴性が把握できないものもある。これは同一層内であったことにも影響し



第８図　遺構指示図

第１表　遺構計測表

遺構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	表出面標高 m	炭化物	焼土	摘要
P01	20.0	52.0	16.0	175.479	少量		
P02	—	—	18.0	175.509	少量		
P03	28.0	44.0	39.0	175.509	少量		
P04	—	—	28.0	175.509			
P05	30.0	32.0	20.0	175.499			
P06	14.0	20.0	14.0	175.499			
P07	14.0	50.0	16.0	175.509			
P08	17.0	18.0	12.0	175.519	少量		
P09	20.0	20.0	16.0	175.519	少量		
P10	26.0	26.0	19.0	175.499			
P11	20.0	26.0	10.0	175.509			
P12	24.0	26.0	25.0	175.509			
P13	24.0	26.0	13.0	175.509			
P14	33.0	40.0	20.0	175.499	少量		
P15	15.0	16.0	13.5	175.484	少量		焼石
P16	22.0	22.0	20.5	175.474			
P17	28.0	36.0	20.0	175.469	少量		土師器1点
P18	22.0	22.0	14.5	175.484			
P19	20.0	22.0	7.0	175.469			
P20	27.0	48.0	13.0	175.479	少量		
P21	28.0	28.0	35.5	175.494	少量		
P22	12.0	16.0	16.0	175.499			
P23	19.0	20.0	14.0	175.489	少量		
P24	—	—	27.0	175.489	中量		陶磁器1点
P25	18.0	—	14.0	175.489	少量		
P26	16.0	18.0	10.5	175.504	少量		
P27	16.0	20.0	9.5	175.514	少量		
P28	26.0	31.0	20.0	175.519	少量		
P29	28.0	28.0	20.0	175.499	多量	少量	
P30	15.0	18.0	11.0	175.509	少量		
P31	16.0	16.0	10.0	175.509			
P32	18.0	18.0	15.0	175.509	少量		
P33	19.0	22.0	9.0	175.509			
P34	21.0	22.0	12.5	175.514	少量		
P35	32.0	33.0	25.5	175.514	中量		
P36	—	—	38.5	175.504	中量		焼石
P37	21.0	—	35.0	175.509	中量		
P38	16.0	16.0	21.0	175.509	少量		
P39	18.0	26.0	26.0	175.509	少量		
P40	28.0	28.0	25.0	175.499	少量	少量	
P41	41.0	46.0	12.5	175.494	少量		
P42	20.0	48.0	21.0	175.499	中量		
P43	20.0	25.0	19.0	175.499	少量	少量	焼石
P44	—	—	13.0	175.529	少量		
P45	25.0	30.0	14.5	175.534			
P46	—	—	12.0	175.559			
P47	—	—	13.0	175.559			
P48	17.0	20.0	7.0	175.569			
P49	18.0	18.0	12.0	175.569			
P50	28.0	—	4.0	175.569			
P51	—	—	11.0	175.569	少量		
P52	—	—	17.0	175.559	少量		
P53	22.0	26.0	28.0	175.559	少量		
P54	24.0	28.0	9.0	175.559			
P55	18.0	34.0	28.0	175.559			
P56	27.0	31.0	14.0	175.559			
P57	10.0	42.0	22.0	175.559			
P58	10.0	11.0	12.0	175.549			
P59	22.0	—	9.0	175.549	少量		
P60	18.0	19.0	9.0	175.549			
P61	20.0	20.0	9.5	175.534			
P62	18.0	18.0	12.0	175.529	少量		
P63	20.0	22.0	11.0	175.529	少量		
P64	14.0	14.0	13.5	175.524	少量		
P65	26.0	30.0	26.0	175.519	少量		
P66	—	—	23.0	175.529	中量		
P67	—	—	32.0	175.509	少量		
P68	18.0	48.0	27.5	175.514	少量		
P69	22.0	26.0	29.0	175.489	少量		焼石
P70	12.0	18.0	8.0	175.499			
P71	22.0	26.0	16.0	175.509	少量		
P72	20.0	24.0	17.5	175.494	少量		
P73	—	—	9.0	175.469	少量		
P74	14.0	14.0	9.5	175.424			
P75	16.0	24.0	14.0	175.419			
P76	38.0	66.0	18.0	175.419			
P77	16.0	16.0	8.0	175.769			
P78	16.0	16.0	3.0	175.779			
P79	38.0	62.0	17.0	175.649			
P80	16.0	32.0	12.5	175.649			
P81	26.0	29.0	6.0	175.539	少量		鉄滓2点
P82	16.0	22.0	21.5	175.444			
P83	22.0	26.0	24.0	175.449			
P84	18.0	18.0	8.0	175.399			
P85	18.0	24.0	12.5	175.389	少量		
P86	20.0	26.0	12.0	175.389	少量		
P87	16.0	16.0	11.0	175.409			
P88	20.0	26.0	19.0	175.369	少量		
P89	16.0	18.0	9.0	175.389			
P90	22.0	26.0	13.0	175.389	少量		
P91	22.0	28.0	17.0	175.409	少量		
P92	16.0	16.0	8.5	175.424	少量		
P93	21.0	—	33.0	175.529	少量		土師器2点
P94	22.0	22.0	26.5	175.524	少量		
P95	20.0	20.0	15.0	175.529	少量		
P96	32.0	40.0	36.0	175.539	少量		土師器1点・焼石
P97	18.0	—	8.0	175.539	少量		
P98	22.0	26.0	34.5	175.544	少量		
P99	20.0	22.0	10.0	175.549	少量		
P100	12.0	14.0	8.0	175.549	少量		
P101	20.0	24.0	13.0	175.569			
P102	12.0	12.0	14.0	175.549	少量		
P103	16.0	22.0	11.0	175.549			
P104	26.0	26.0	15.0	175.549	多量		
P105	—	—	10.0	175.529			
P106	22.0	26.0	10.0	175.519			焼石
P107	20.0	20.0	6.0	175.519			
P108	26.0	32.0	29.0	175.489	少量		
P109	20.0	22.0	16.0	175.559	少量		
P110	18.0	18.0	9.0	175.559			
P111	22.0	42.0	24.0	175.579	少量		焼石
P112	16.0	20.0	11.0	175.579	少量		
P113	24.0	24.0	21.0	175.579	少量		
P114	28.0	30.0	28.0	175.579	少量		
P115	24.0	26.0	7.0	175.599	少量		
P116	30.0	32.0	24.0	175.629	少量		石臼1点
P117	28.0	32.0	12.0	175.629	少量		
P118	—	—	17.5	175.624	少量		
SK01	56.0	58.0	19.0	175.479	多量		土師器3点・焼石
SK02	84.0	124.0	11.0	175.479	多量	多量	土師器5点・鉄滓5点
SK03	24.0	64.0	24.0	175.499	少量		
SK04	38.0	46.0	12.0	175.499			
SK05	44.0	74.0	25.0	175.499			
SK06	—	—	25.0	175.509	少量		土師器2点
SK07	40.0	52.0	22.5	175.504	少量		
SK08	24.0	104.0	45.0	175.499	少量		土師器1点
SK09	60.0	102.0	20.0	175.499	少量		土師器4点・鉄滓1点
SK10	82.0	116.0	17.0	175.499	中量		
SK11	—	—	14.5	175.504			土師器1点・焼石
SK12	46.0	82.0	15.0	175.499	少量		土師器2点・瓦質器（擂鉢）1点
SK13	72.0	90.0	23.0	175.499	少量	多量	打製石斧1点・縄文土器1点・土師器25点・土錘1点
SK14	26.0	74.0	8.0	175.499	少量		焼石
SK15	30.0	40.0	8.5	175.504			
SK16	86.0	100.0	31.5	175.469	少量	少量	土師器3点
SK17	—	—	19.0	175.509	少量		土師器3点
SK18	—	—	33.0	175.499	中量		土師器9点
SK19	24.0	52.0	19.0	175.509			
SK20	52.0	184.0	62.0	175.509	多量		黒曜石(白)1点・土師器62点・瓦器7点・土錘1点・陶磁器3点(青磁1点)・鉄滓3点
SK21	40.0	48.0	49.0	175.509	中量	少量	
SK22	34.0	50.0	5.0	175.569			
SK23	20.0	134.0	7.0	175.569			焼石
SK24	32.0	42.0	21.0	175.559			
SK25	40.0	54.0	23.0	175.559	少量		焼石
SK26	38.0	44.0	20.0	175.549			
SK27	46.0	52.0	17.0	175.549			
SK28	34.0	66.0	29.0	175.549	少量		
SK29	50.0	56.0	13.0	175.539	少量		
SK30	36.0	64.0	30.0	175.529	少量		
SK31	30.0	—	9.0	175.549	少量		
SK32	30.0	46.0	7.0	175.549	少量		
SK33	—	—	13.0	175.519	少量		
SK34	50.0	—	34.0	175.509	少量		打製石斧1点・土師器4点
SK35	22.0	—	16.0	175.359			
SK36	36.0	38.0	21.0	175.389			
SK37	—	—	7.0	175.419			
SK38	42.0	58.0	12.0	175.429			
SK39	—	—	50.0	175.399	少量	少量	骨片少量
SK40	—	—	22.0	175.499	少量	少量	陶磁器（擂鉢）1点・骨片少量
SK41	—	—	31.0	175.559	少量		土師器1点・焼石
SK42	—	188.0	23.0	175.419			打製石斧2点・焼石
SK43	70.0	90.0	6.0	175.689	少量	少量	ふいごの羽口
SK44	50.0	132.0	10.0	175.779			
SK45	—	—	18.0	175.739	少量		縄文土器2点
SK46	—	—	18.0	175.809			
SK47	—	—	32.0	175.689			
SK48	70.0	138.0	30.0	175.669	少量		打製石斧1点・縄文土器1点・土師器5点・焼石
SK49	62.0	70.0	23.0	175.479	中量		
SK50	100.0	110.0	24.5	175.474	少量		土師器27点・瓦器(擂鉢)1点・土錘1点・足鍋1点・鉄滓1点・焼石
SK51	130.0	132.0	11.0	175.409	多量		土師器1点
SK52	—	68.0	9.0	175.419	少量		
SK53	24.0	56.0	14.0	175.409			
SK54	24.0	70.0	33.0	175.369	多量		土師器3点
SK55	34.0	70.0	11.0	175.409	多量		
SK56	38.0	—	41.0	175.449	多量		土師器1点
SK57	—	—	16.0	175.479	少量		
SK58	50.0	68.0	34.0	175.519	多量		焼石
SK59	44.0	104.0	33.0	175.589	少量		焼石
SK60	44.0	26.0	12.0	175.679	少量		
SK61	50.0	66.0	27.0	175.679	少量		
SK62	80.0	—	18.0	175.679	少量	少量	縄文土器1点



第９図　遺構陥入状況図（1）

ているものと考えられる。

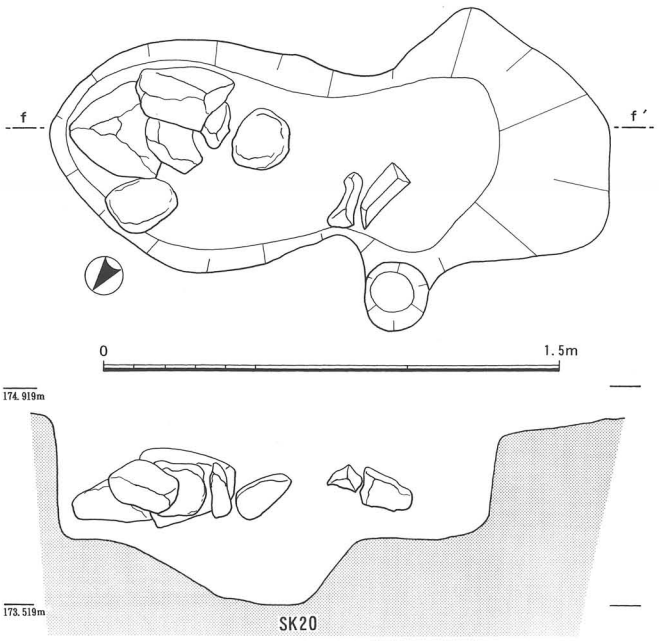
なお遺構については，その形状から柱穴状のものをP，土坑状のものをSKと略号することにしている（第８・14図）。

２．検出遺構

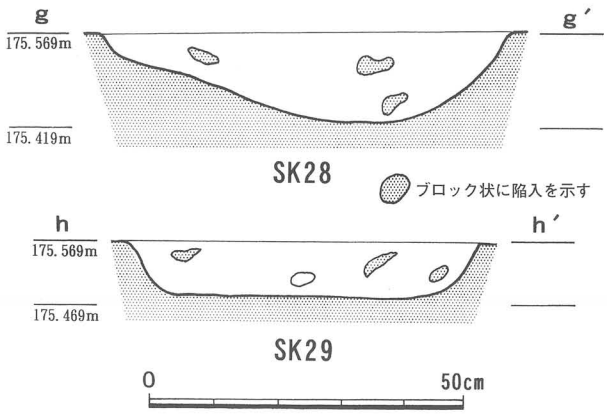
ピット（P）と略称するものは，188穴検出された（第８図・第１表・図版４－７）。その大半は径20～30㎝を測るもので，主にA・B～C・D区の北半面に多く確認された（図版６－５）。これらは３層と４層との層界に検出されたもので，いずれも中世期の文化層として捉えた３層中位以上の灰色土系の土質が坑内に陥入していた。また共伴した土師器・陶磁器片などから考えて，その柱穴群はほぼ同時期のものと想定されるが，削平度の高い上位層の出土であったために，中にはすでに削平されて消去されているものもあろうかと考えられる。

その柱穴群のほとんどが掘立式のものであって，中にはP68・P93・P96にみられるように（第13図・図版５－６・６－１）柱を支えた，と思われる補強石といえるものを伴うものもみられたのである。そしてこれらの柱穴から掘立柱建物を浮き彫りにしてみようと試みたが，数次における立て替えが行われたことが考えられ，また180基余りという柱穴数から様々に捉えられ，限定することは容易ではない。しかし間隔的に捉らえると，そこにはある程度の規準的なもの，そして方向性が看取できないでもないと思われる。

例えば，北西側を北西－南東方向にP21・P29・P35・P93・P99の配列した柱穴間隔を測ると，１間（６尺６寸）の約２ｍを平均値とした４間であった。この間隔・配列を基準として捉られると，そこには同一方向で相対する３つの配列がみられたの

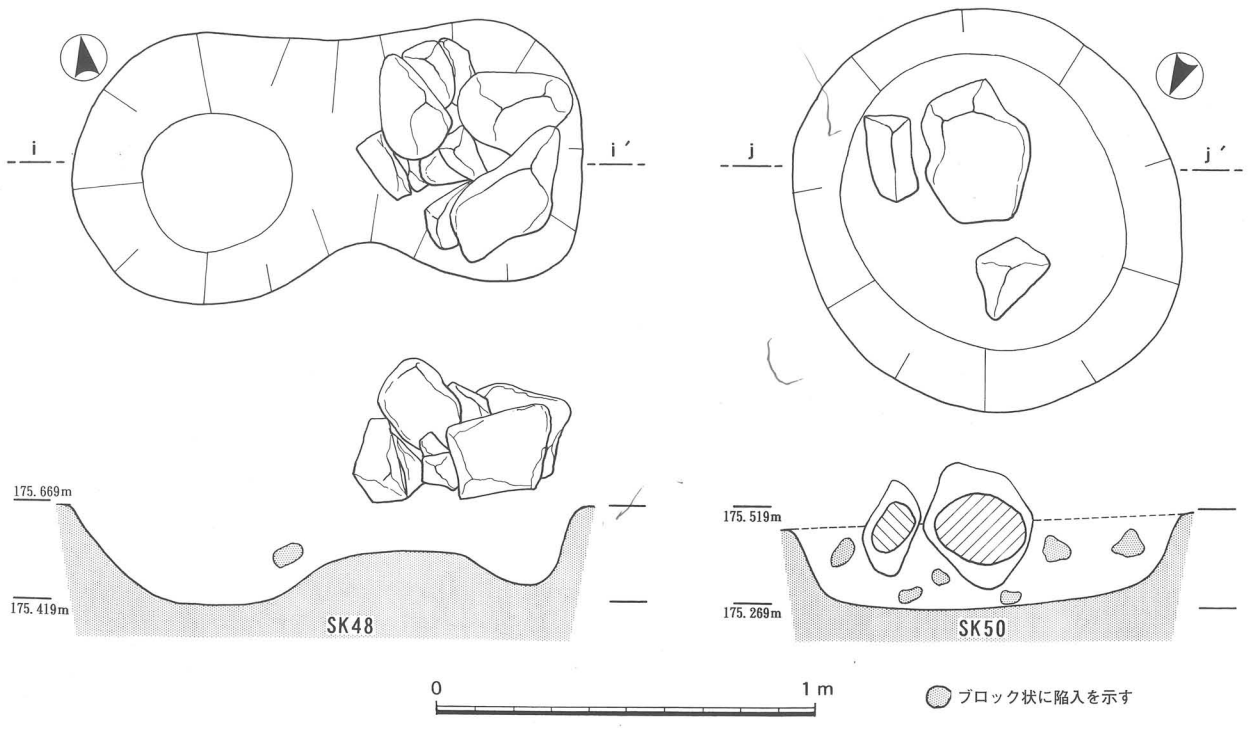


第10図　遺構陥入状況図（2）



第11図　遺構陥入状況図（3）

である。その１つは，その南西側のP26－P104・P112・P117で，それは基準列より１間ほど南東側に長く配列するものであった。一方，北東側ではP39・P66・P91の配列，そして土坑として捉えた中に，ピットの切合いであったSK30・SK50とP53などの２つの配列がみられたのである。これらの順列する柱穴列は，同時期の相対するものと想定すると，北西－南東方向に最長の５間（10ｍ）までの柱間隔がよみとることができる。一方，それらを北東－南西方向にみると，その南東側からSK54・P91·P99・P112配列及び，SK30・P66・P93・P104などの列が並列し，また，その次ぎに配列するP53・P39・P35なども順列して相対することになる。このように同方向においても，３間（６ｍ）までの柱間隔をもつ配列が捉えられるのである。したがって，それら配列・方向性から考えて，北西－南東方向には最長４～５間の柱間隔をもつ柱穴が配列され，またそれは北東－南西方向に２～３間の間隔で形成されていたのではないかと想像されるのである。つまり32～60㎡程度の面積をもつ，掘立式の建物が存在したのではないかと推察されるのであった。一方，C・D区の南半面で検出されたP77・P78・P79・・・などの柱穴には，３層下位部の暗褐色系のものが陥入し，そこには共伴する遺物などはみられない。しかしそれらを層序状況・遺物出土状況からみると，縄文遺構として判断できるものの，その柱穴に数基がからむということもあって，その機能的性格に

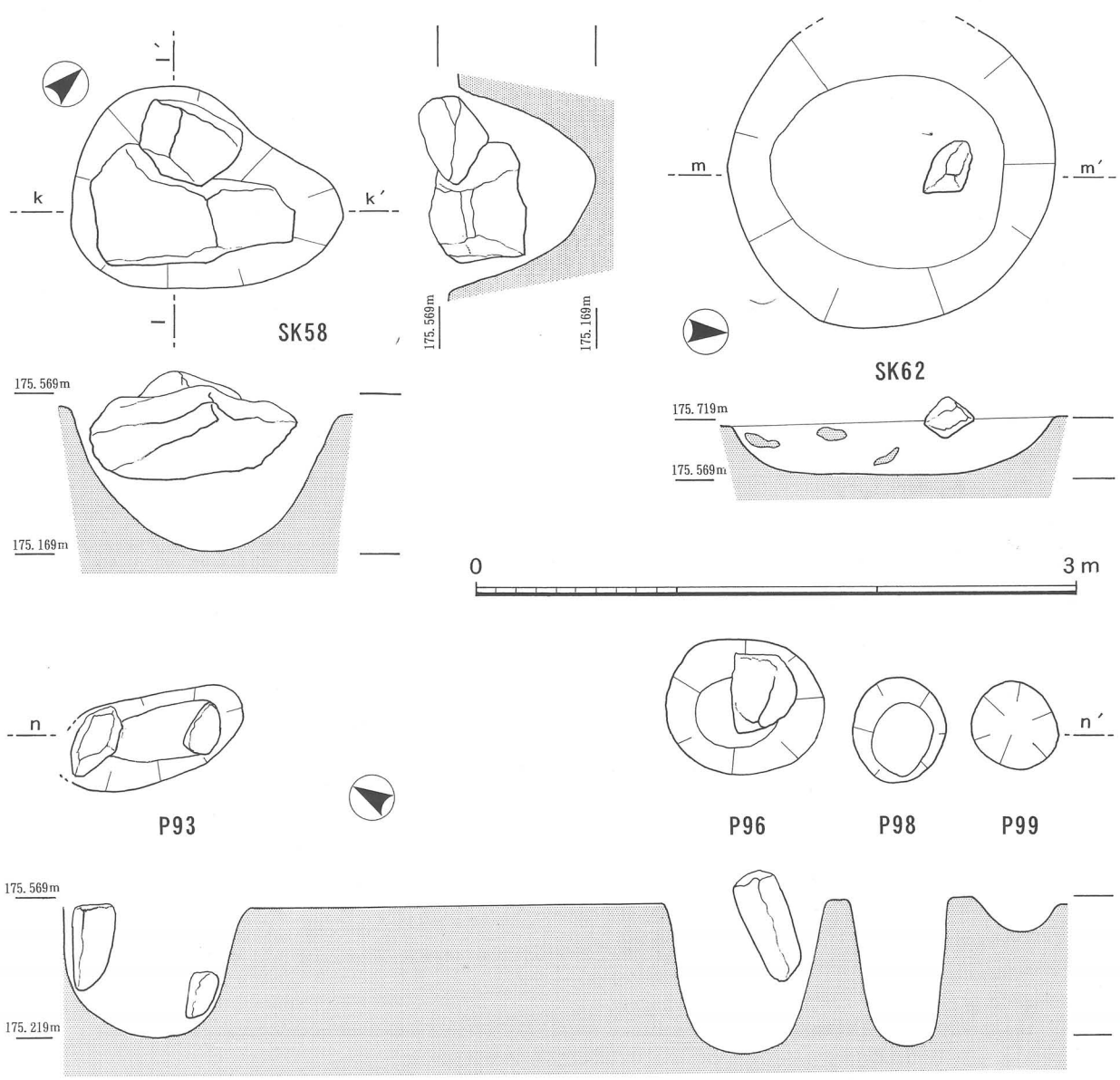


第12図　遺構陥入状況図（4）

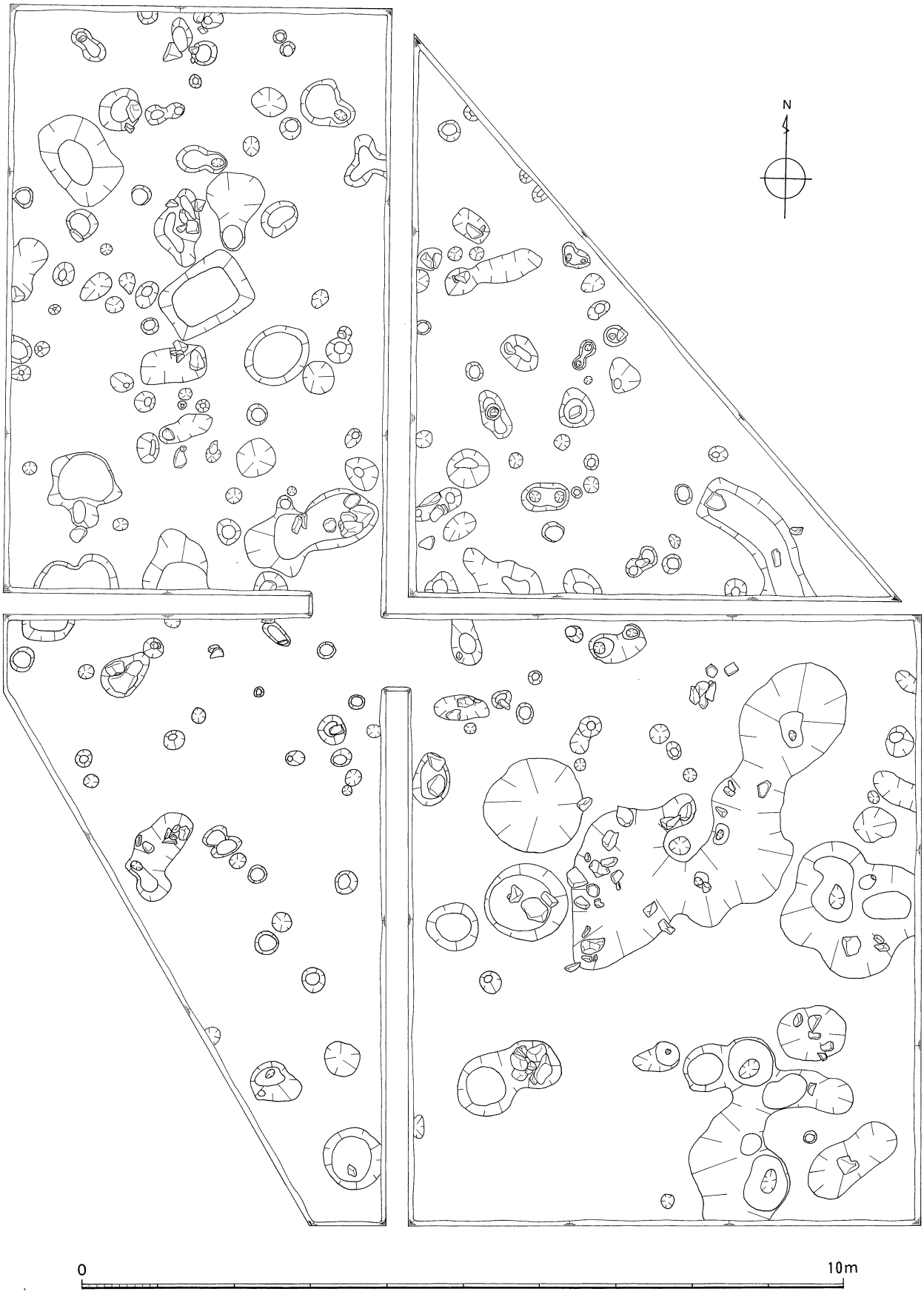
ついては捉えることができなかったのである。

SK（土坑）と略号するものは，62坑が検出された（第８図・第１表・図版３－５・４－２・４－３）。いずれもこれらはピットと同様，３層と４層の層界面に検出され，３層の灰～暗褐色土が陥入していた。このうちA区の北西端面に確認されたSK02では，橙褐色の焼土が出土しており，また炭化物も顕著であった（第９図・図版３－６）。このような状況から，炉であった可能性が強いが，削平などがあって，原形のものであるかは明確にはできなかった。なお本坑からは土師器・鉄滓の各５点が検出された。

そしてその南東面に確認されたSK10・SK12・SK13・SK16は，最大径80～100㎝前後，深さ15～30㎝測り，長方形・ほぼ円形を呈すものである（第９図・図版３－５・３－７・３－８）。その坑内には３層上位部の灰色土系ものが陥入し，部分的に４層の黄灰褐色砂質土が嵌入していたのである（図版５－１～５－３）。またSK12を除く土坑からは，中世期の遺物が共伴していることから，同時期のものと想定できるが，その機能的用途は明らかできなかった（図版６－４）。



第13図　遺構陥入状況図（5）



第14図　遺　構　図

そして同区内の南東隅に検出されたSK20（図版４－１）は，最大長径が184㎝，短径52㎝を測って，深さ62㎝で不整形を呈した土坑である。その坑壁は斜度もち，坑内には３層上位部の土質が陥入し，炭化物が多量にみられた。また，坑中には径20～30㎝を測る河原石が８石確認され，それらの大半は焼石で，主に北東側に集中してみられたのである（第10図・図版５－４）。こうした意図的と思われる集石遺構は，C区のSK50（第12図・図版４－６）・D区のSK58（第13図・図版４－８）土坑にも比較的大きい石が配置され，また中には意識的に割られたものが使用されていることから，形態的にみて，礎石的であったと想定した（図版５－８・６－２）。

なお，その内のSK20・SK50土坑からは，土師器・瓦器・土錘など合計100点余りものが共伴し，また搬入されたと思われる１点の黒耀石（白）が出土している。

またB区の西壁寄りに検出されたSK28・SK29は，凡そ径50㎝前後で，深さ13～29㎝を測って浅く，比較的小さなものであった（第11図・図版５－５）。これらも３層から４層に至る陥入状況から中世期の遺構と考えられるが，しかし共伴する遺物などがみられなく，判然としないものであったのである。

そして南側のC区に検出された遺構の中には，遺物から縄文・中世期のものが重複する土坑ではないかと思われた。それは南西端に検出されたSK48（図版４－５）で，短径70㎝，長径138㎝を測り，瓢箪状を呈して深さ30㎝と比較的深く，坑壁は緩斜であった。坑内には３層の灰～暗褐色土が陥入しているのが本遺跡の基準であるが，それが土質・色調的にみても，上～中・下位部のどちらのものかは見極はめできなかったのである。そして坑上には，意識的と想定される径20～40㎝大ほどの河原石が10石伴ない，また，それが坑の北東側に重なるように配石していたのである。一方，坑低部は２つの皿状の陥ち込みになっていて，そこには切り合いがみとめられたのであった（第12図・図版５－７）。そしてそれを共伴遺物の関係からみると，坑の南西半部から５点の土師器が確認され，また１点の打製石斧がほぼ中央部に，北東半部寄りに縄文土器の１点が出土している。これらのことから新旧関係はある程度判断できたものの，しかし精査できなかったので上位部に構築された配石が，どのような性格のものかは判らなかったのである。また，それに関連すると思われる遺構がその西面に，そしてD区の南端面に確認された。それはSK42・SK45・SK62などの土坑で，３層下位部の暗褐色系の土質ものが陥入し，縄文遺物を伴っていたのである（第13図・図版４－４・６－３）。これらの遺物の包含・共伴性から，それらは同時期の一連性をもったものと想定される。しかし拡張していないので全体像は把握できなかったのが現状であった。（栗田　美文）

第4章　出　土　遺　物

第1節　はじめに

採り上げについては，基本的に原位置法式を用いて行った。ただし，耕作土の1層および酸化鉄が含浸した2層においては，層位を記して採集のみにとどめたものもあり，またこれ以外に廃土，あるいは隣近で採集したというものも数点含み，すべて原位置法式で実施したものではない。

また，本遺跡からは遺物集計表に示したとおり，1726点のものが出土・採集されているが，炭化物や焼土においては数量は示していないし，金属滓（鉄滓）は図掲しなかった。

第2節　出土・採集遺物のようす

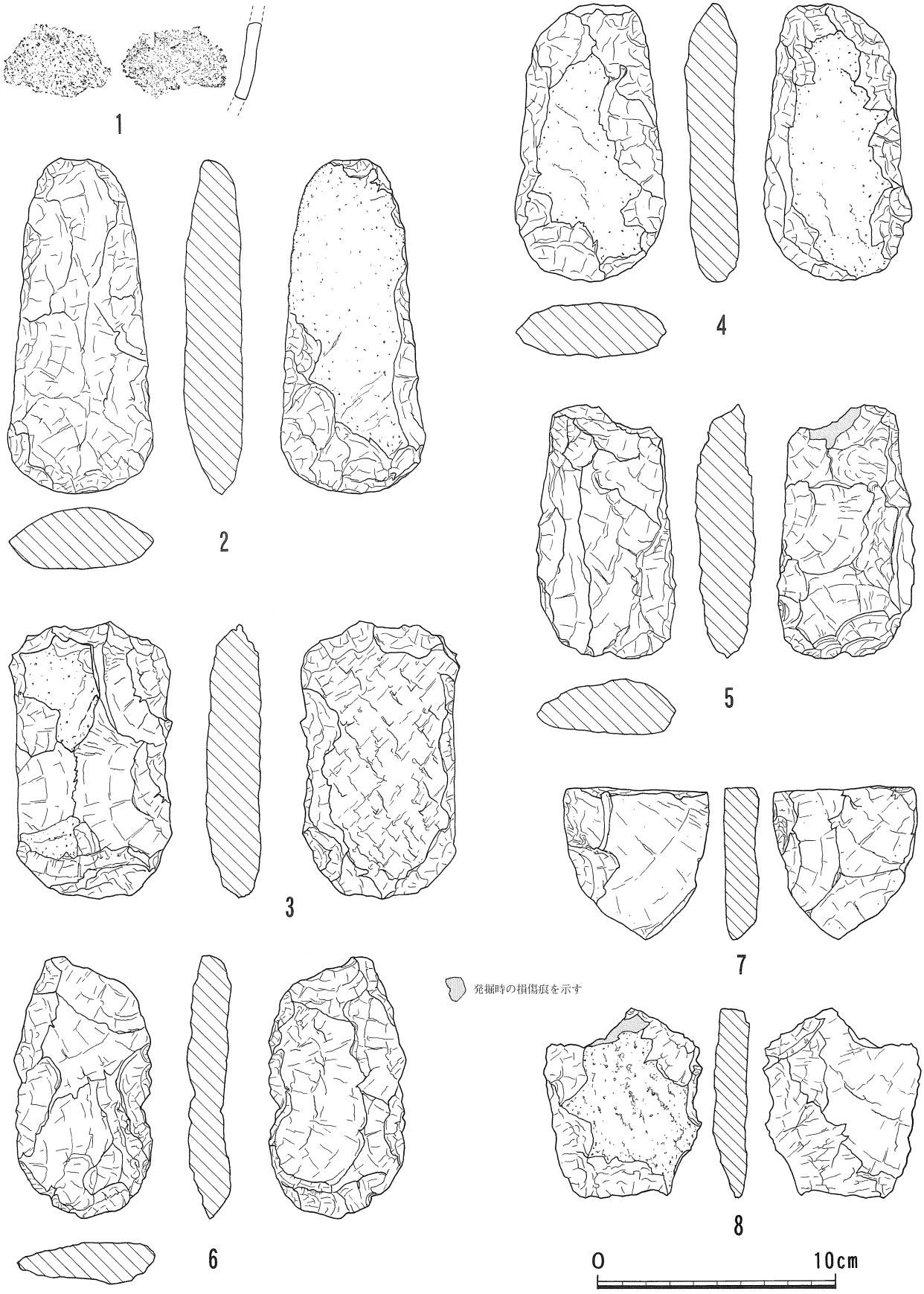
本遺跡で最も多く出土したのが土師質土器の1403点，そして金属滓の86点，陶磁器類の82点，瓦器質土器の50点，土錘の38点，金属器類の30点とつづき，その大半は中世遺物で占められる（約98%）。

他では縄文土器などの数点に比べて，14点の打製石斧の出土数は目をひくとともに，縄文時代も介在していることがわかった。ただし全体の1.4パーセントであり，これらの縄文遺物は南東側の極めて限られた辺部を中心に出土したものであった。しかも高い深度による削平が行われていて，その様態は確かにできなかったのである。

さて，問題は98パーセントに及ぶ中世遺物で，このうち土師質・瓦器質土器が1453点と，全体の約

第2表　遺物集計表

		打製石斧	石　核	敲　石	磨　石	黒曜石	縄文土器	弥生土器	土師質土器	瓦器質土器	土　錘	須恵質器	陶磁器	鍋(足部)	和　鏡	鉄　剣	金属類	金属滓	石　臼	羽口？	炭化物	焼　土	計
A区	1・2層								1				11										12
	3　層	1							282	4		1	5			1	13	27			少量		334
B区	1・2層	1							25		1		7										34
	3　層	1	1						152	7	3			2		1		7			少量		174
	3層下面								44		2						1	1					48
C区	1・2層								35		2		5					1			多量		43
	3　層	4		1	1				279	6	14		4		1		9	12					331
D区	1・2層	1							1				9										11
	3　層								57	4	1		2					2				少量	66
	3層下面								86	3	6		2	1			1	5				少量	104
十字トレンチ	東辺1·2層								5				7										12
	東辺3層								74	4	2						1	6					87
	西辺1·2層								1				3	1									5
	西辺3層								50	4							1	4					59
	南辺1·2層												6										6
	南辺3層								42	1	3						1	1					48
	北辺1·2層												8										8
	北辺3層								59	4	1		1				1	4					70
ABベルト									3				1					1					5
BCベルト								1(?)	11	1							3						16
CDベルト									18				4					2					24
ADベルト									12	1			1										14
共伴遺物		6				1	5		164	10	3		5	1				11	1	1			208
廃土・採集									2	1			1			1		2					7
計		14	1	1	1	1	5	1	1403	50	38	1	82	5	1	3	31	86	1	1			1726



第15図　縄文遺物実測図

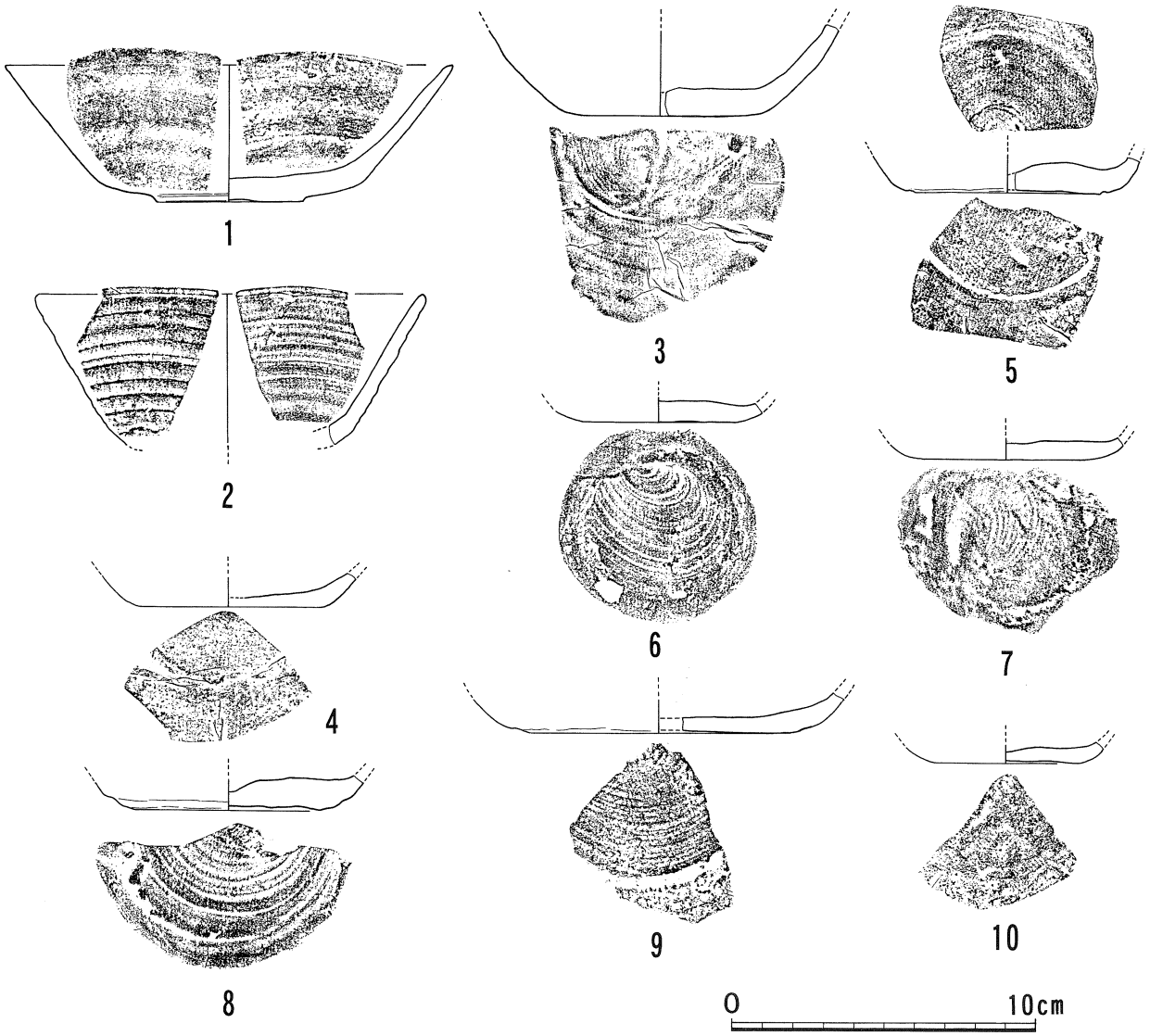
84パーセントを占める。これらは器形・文様あるいは調整などから捉えようとしても，その事例が極めて限られていること，また端的な時期差が捉えることが困難であることなどから，判断が下しにくいのが実状である。しかしながら，共伴した陶磁器類からみると，その多くは15世紀に位置付けられるものであるから，それら土師質・瓦器質土器は該当時期の範疇で捉らえることができるものといってよいだろう。

そして，注意されるのは86点の鉄滓，１点の羽口と思われるものの出土である。これらは中世遺構との共伴性からみて，該期のものであることがわかったとともに，本住居者が鉄の精錬技術を習得していたということであろう。ただし今回，化学分析を行っていないので，詳細については明確にはいえない。

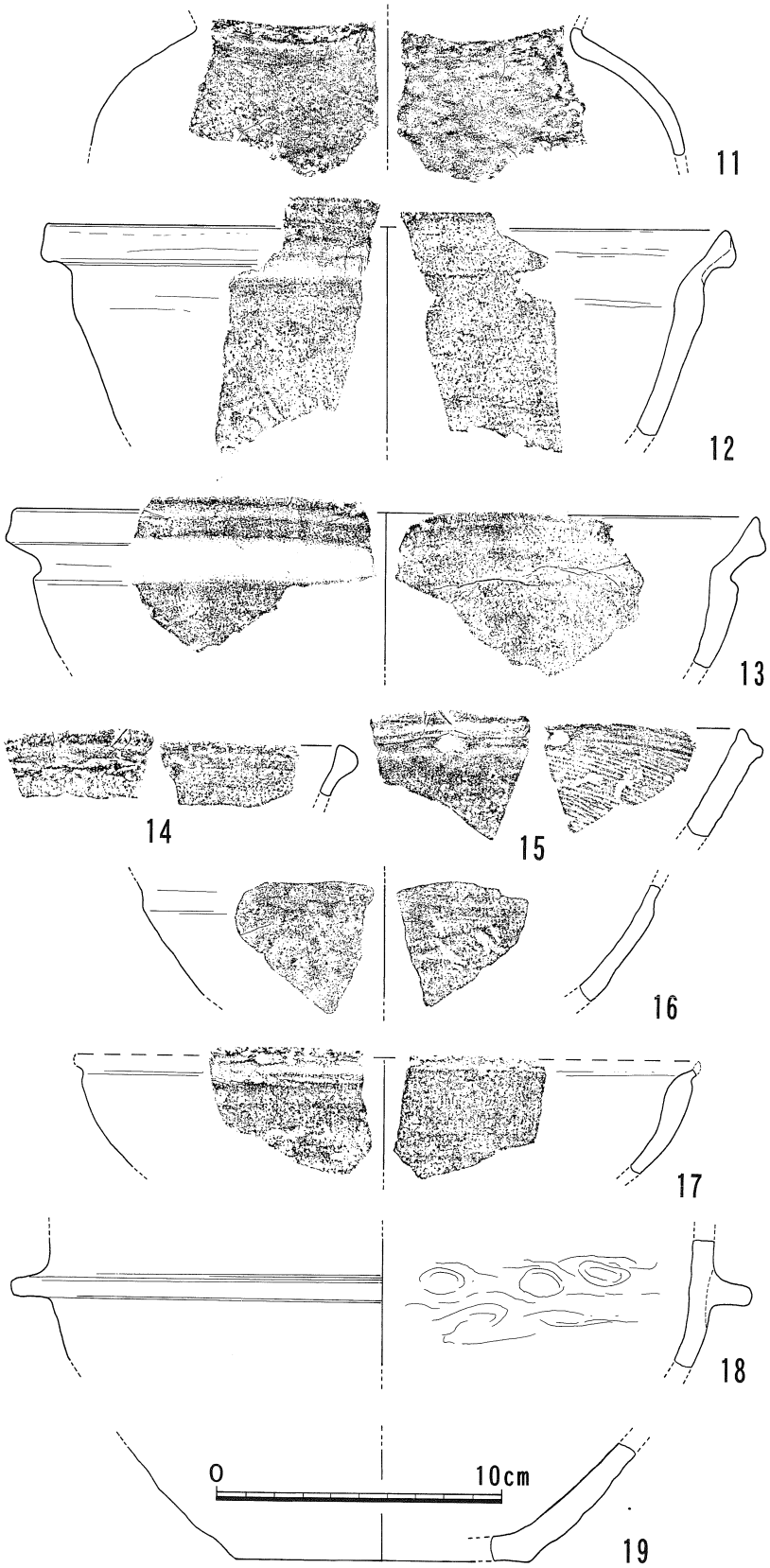
第３節　実 測 遺 物

１．縄 文 遺 物

縄文土器（第15図・図版７－１）本調査では５点の縄文土器，そして１点の弥生土器と思われるも



第16図　土師質実測図



第17図　瓦質実測図

のが出土したが，いずれも小・細片で，このうち１と図示したものが最も大片といえる縄文土器であった。

その１は，粗製系の胴部片で，外面にはケズリ（条痕かも知れない），内面はナデをもって調整したもの。色調は暗褐色を呈し，外面には煤が付着して黒褐色。調整の仕方に問題がのこるものの，後期に比定できるものではないだろうか。

石　器（第15図・図版８－１）２～８は，いずれも玄武岩質の打製石斧で，このうち７・８は損壊したもの。うち２は，器長13.6cm，最大幅約６cm，最大厚2.6cmを測る。腹面とした裏面に自然面がみられるものの，丁寧な剥離で成形した秀品といえる打製石斧。器形または厚みを有することからみて，磨製石斧の未完成品であろう。５は短冊形，３～５は撥形といえるもの。

２．中世遺物

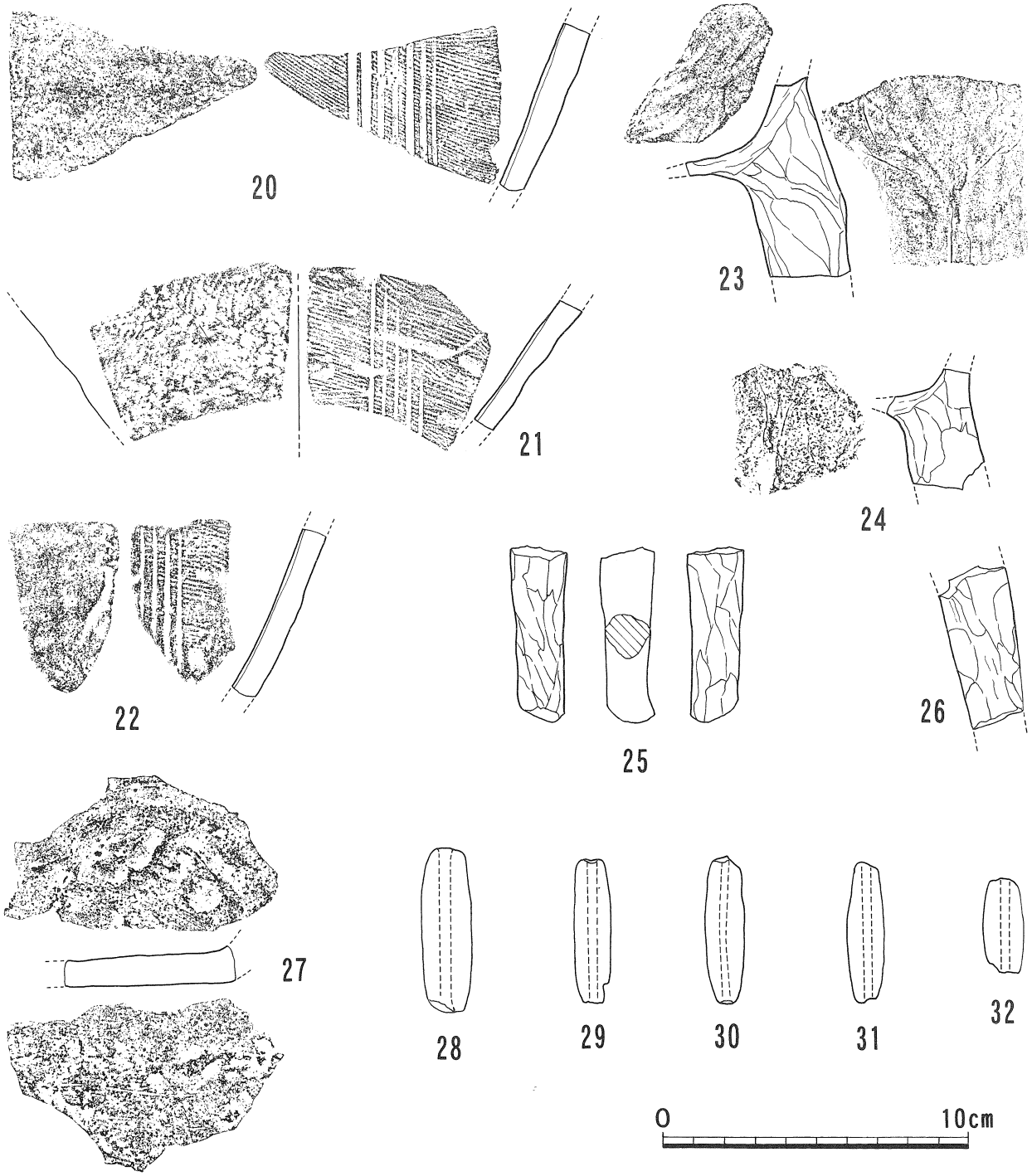
土師質土器（第16図・図版７－３）１～10は，いずれも朱味おびた土師質系のもので，口縁部を欠くものの底部が薄く，またその径が小さいことから，いずれも盤・皿類のものであろう。

うち１は，上半の体部が直線的で薄く，底部には僅かな高台部をもつもの。内外面には施文具による調整痕が僅かみられ，

凹凸する。仕上げは，外面は回転ナデ，内面は不整形のナデで，外面には煤が付着する。２は，前者と同様な体部形のもので，とくに外面の調整痕は顕著で，凹凸している。４の底部は薄く，接置面の切り放しは回転糸切り。

以下，５～10はいずれも切り放しは回転糸切りで，その接置部は１を除き，ベタ底といえるもの。また底部内面の中志部にはU字状の凹みがみられ，とくに８は顕著である。

瓦器質土器（第17・18図・図版７－３・－４）11は，口縁部を欠くが，器形からみて瓦器質の壺と思われる。内外面ともナデで，器面は粗く，精緻なものとはいえない。色調は橙～褐色を呈し，捉

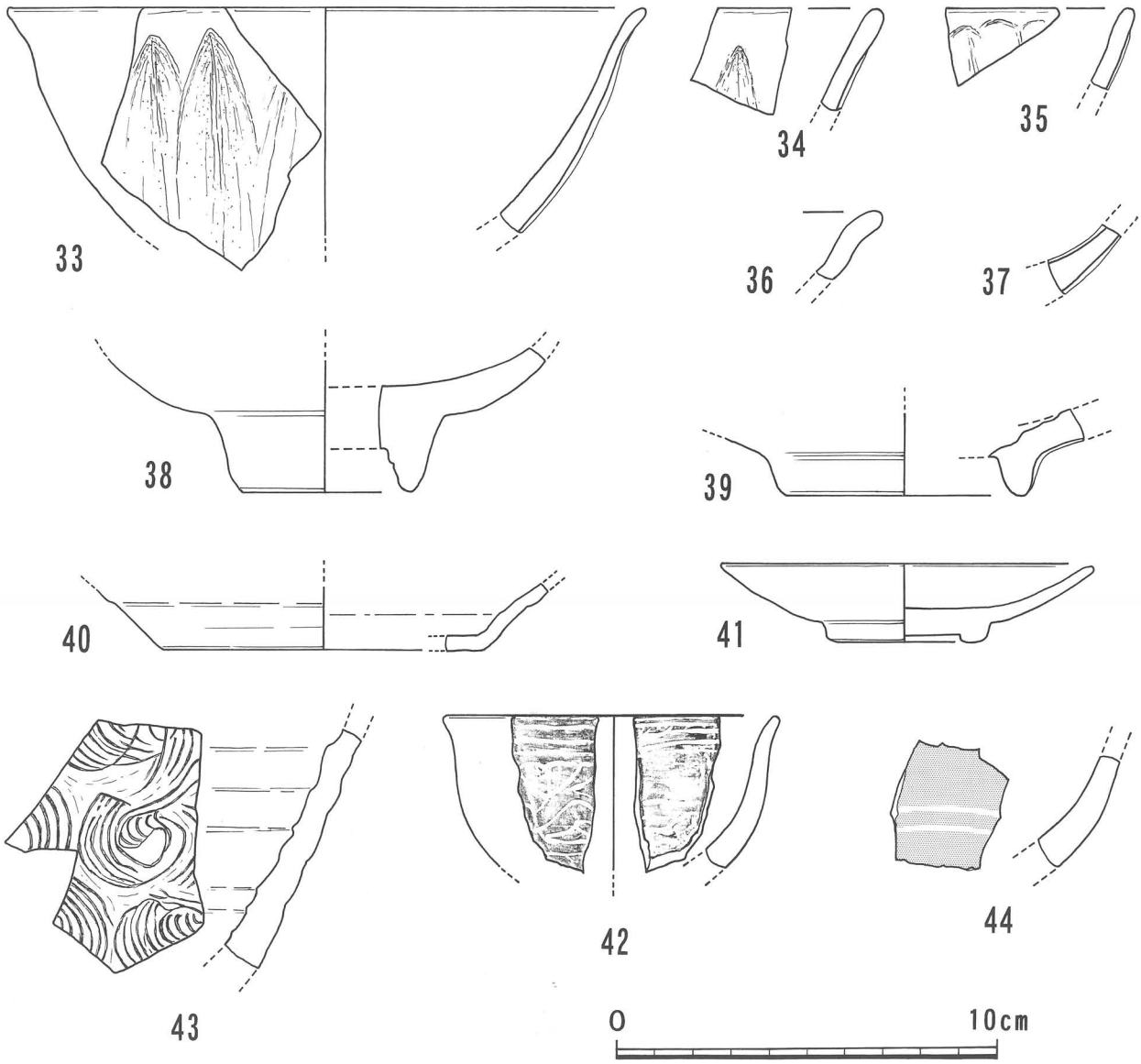


第18図　瓦質・須恵器・土錘実測図

え方によっては土師質ともいえるもの。12は，足鍋の上半部。頸部は短く外傾して「く」の字形を呈し，口縁部はその逆を成して肥厚させている。内外面とも精緻なヨコナデで，胎土の色調は白灰色，外面は暗褐色である。13も，12と同形態のものであるが，頸部の傾き具合が12に比べて明瞭である。調整は精緻なナデで，胎土の色調は白灰色であるが，器面は黒褐色。14も，足鍋のものであろう。

15は，擂鉢の口縁部で，体部は直線的。口端部外面に僅かな凹線がみられ，その器肉が張出したままで口縁形をつくる。内面は斜向のハケメ，外面はナデで仕上げる。形態的にみて，南北朝から室町初期のものと思われる。16・17とも，口唇部を欠く鍋系のもの。18は，羽釜で，外面側に鍔を有し，その鍔は上下に片寄らず，均等的に張り出し，その端部は円みおびる。成形は丁寧とはいえず，指頭痕などがみられ，仕上げはナデである。色調は，橙褐～灰褐色である。

19は，壺・甕系の下半部と思われるもの。外面には成形の指頭痕などがみられ，凹凸するが，内面は横方向の丁寧なハケメ調整。20は，擂鉢の胴部片。外面は調整痕がのこって波うつが，内面には



第19図　陶磁器実測図

横・斜め方向の精緻なハケメ，そして縦方向からは７条の御目が付けられる。色調は白灰色を呈し，焼成は精良品といえるもの。21・22も，擂鉢の胴部片で，両者とも外面の器壁は凹凸し，とくに前者は斜めのハケメ調整が顕著。内面は横方向のハケメとして，数条単位による御目を施している。色調は外面は灰色・内面は黒褐色を呈する。23～26は，足鍋の足部で，いずれも調整痕がのこり器面は凹凸する。色調は23が褐色，24～26は灰白色である。

須恵質土器（第18図・図版７－４）27は，須恵質土器で，底部と思われるもの。内外面とも器面はザラザラし，仕上げは不整方向のナデである。色調は外面が茶褐色，内面は灰白色で，焼成は堅緻といえるもの。

土　錘（第18図・図版７－５）28～32は，土錘。このうち28は，長さ約5.5cm，最大径約1.8cmを測ってやや大きめ。29・30・31は，細めで，器面は平滑，色調は明朱色，28・32は褐色である。

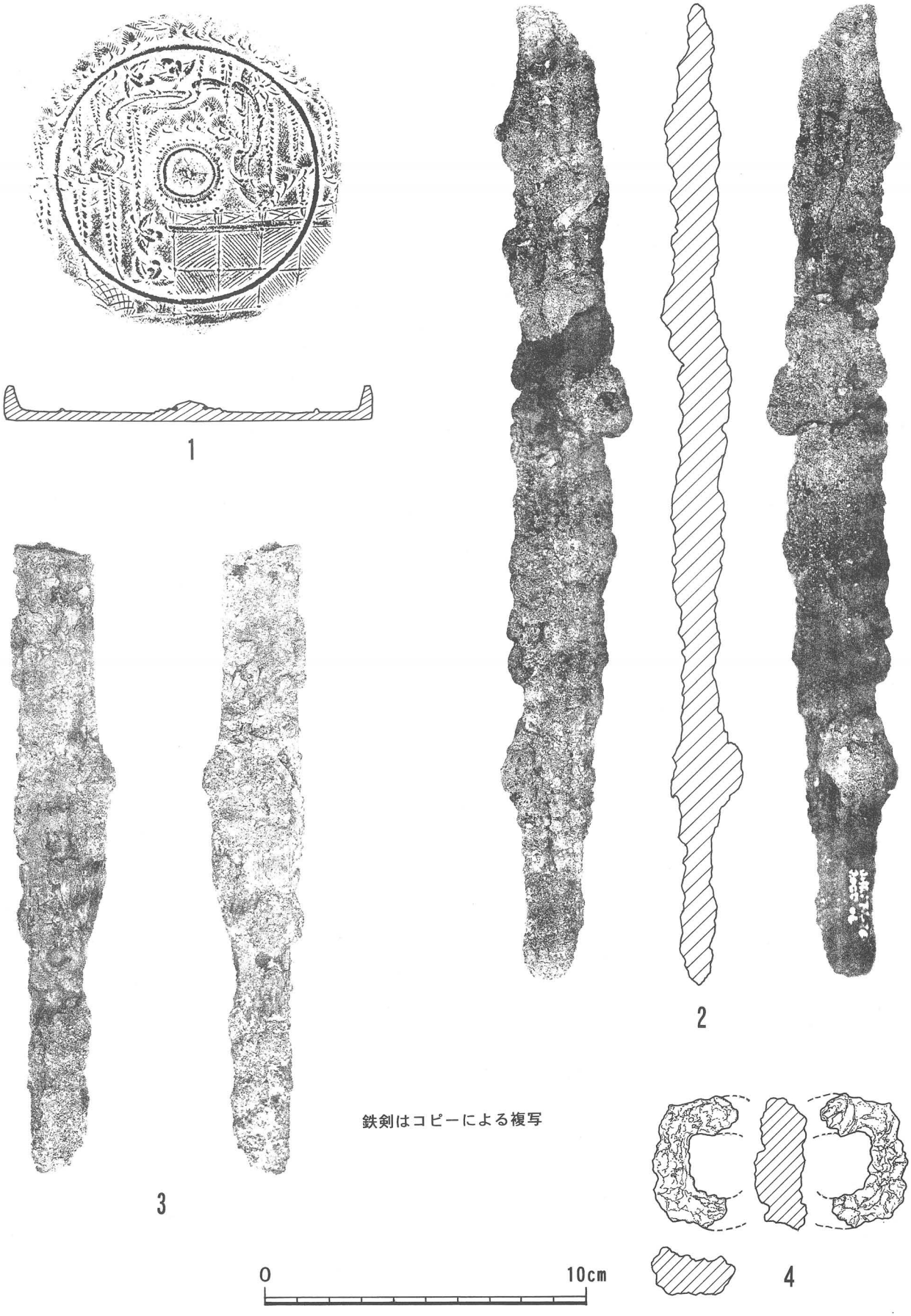
陶磁器（第19図・図版７－５）33～44は陶磁器類。このうち33は，口径約16cmを測る碗形の青磁で，外面に鎬蓮弁文を有するもの。釉は厚く，緑灰色を呈する。おそらく12～13世紀ごろの龍泉窯の所産のものであろう。34も，前者と同形態のものであるが，ただ色調が黄緑色で，その釉層に氷裂状の貫入がみられる。35も，外面に鎬蓮弁文を有したもので，その蓮弁端は円く，そして細い。色調は，かすんだ黄緑色を呈し，蓮弁形態からみて，おそらく15世紀ごろのものと想定できるものであろう。36・37も青磁。前者は口縁部に僅かな反りがあり，釉層には貫入がみられる。38・39は，青磁の底部で，前者は高台が高く，色調は薄緑，後者は灰緑色。40・41は，白磁の皿。このうち前者は器壁は薄く，色調は白～白緑色で，腰部はキリッとしたもの。おそらく景徳鎮系の14世紀のものであろう。また後者は反りのある体形のもので，器壁も厚く，中国産系の15世紀のものと思われるもの。

42・44は，内外面に青磁象嵌といわれる模様を有したもので，うち前者は口径約９cm余りを測る小碗。後者は，その碗形の下半部で，内面にも白灰色の象嵌模様がみられる。おそらく14～15世紀ごろの中国，あるいは朝鮮などで所産された輸入品であろう。43は，青白磁の壺形の梅瓶といわれるものである。内面には横方向の調整痕が段状に付けられ，外面には数条単位の筋書き状による渦巻が彫状に描かれる。色調は，外面は淡青色，内面は淡茶色を呈して塗釉されている。本片は他にも２・３片みられる。13世紀ごろのものと思われ，おそらく伝世品であろう。

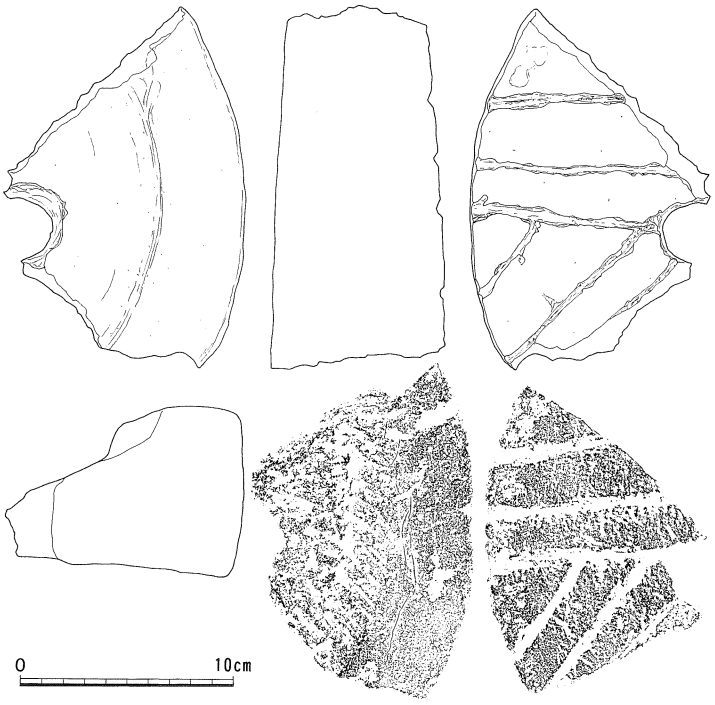
金属器（第20図・図版８－２）１は，腹面を上側にして表出した和鏡（図版７－２）。径11.5cm，外縁厚は約１cmを測る円鏡のもの。鏡腹の中志部に円みの鈕をもち，２方からは示し程度の鈕孔が施されている。そして，鈕座の径は約2.4cm，鈕までの高さ約0.6cm．また中志から１／３程度には半円形の界圏がみられ，その内・外区には一連の絵画文様が施されている。

その鏡腹文は，柳・松の植樹，雀の鳥類，そして桧垣が配された庭園風景といえるもの。和鏡研究者である飛鳥資料館の杉山洋研究官によると「一部には絵画的で鎌倉的な様相であるが，外縁が厚くないことから，12世紀代，それも後半に位置付けられるものではないか」といわれ，氏は「桧垣松柳飛鳥鏡」と銘々した。なお，鏡腹には毛筆による文言が一部みられるが，損消して殆ど判読できない。ただ縦書きされた文頭に「敬白」，そして文尾に年号を示したと思われる「永徳・・・」のみが読みとられる。

２・３は，鉄剣で，本遺跡では３点のものが出土，採集されていれる。そのうち２は，長さ約31cm



第20図　和鏡・鉄剣・口金実測図



第21図　石臼実測図

を測る直刀系の短刀で，最大幅2.3㎝，茎部分は約10㎝を測り，目釘穴を有する（図版８－３）。３は，本遺跡の近隣で採集されたもので，剣先部分を損欠したもの。４は，刃物類の口金。

石　臼（第21図・図版８－１）図示している石臼は，安山系のものであるが，非常に軟質で，津和野の青野山のものと思われ，当地では玄表石と呼称されているものである。

その石臼は，上側に当る上臼といわれるもので，目の方向から左まわしの正常臼である。目の間隔は２～2.5㎝と粗く，また目筋の彫りも厚浅差や不等幅があって粗い。　　（渡辺友千代）

第5章　小　　括

本遺跡は，とくに出土遺物からみると，縄文文化期・中世文化期，そして現代を含む近世以降の文化期が介在していたということができる。

だたし，縄文期のものは，全体の比率からみても，1.4パーセント余りであり，遺構検出でも明確的に捉えられるものは1基に過ぎず，また該地点は深度の高い削平などが認められるなど，そこには具体的な性格は明らかにできなかったのである。そして近世以降のものは，遺構は皆無で勿論のこと，遺物は数点と極めて断片的であって，当文化期が介在したことは確かであったとしても，それらを資料として採るに足りるものではなかったのであった。

さて，そこで全体出土数の98パーセントを占める中世文化期のものであるが，さらにこれらの出土した中世遺物の1702点を100パーセントとした数値でみるならば，土師質・瓦器質土器は1453点で，85.3パーセントを占めて最も多かったのである。これら土師皿，とくに擂鉢・足鍋などにおける調整及び形態からみて，防長地域でいうⅢに併行するものということができ〔註1〕，それは年代的にも後述の陶磁器とも合致するのである。その4.7パーセントの陶磁器類は，12世紀から16世紀のものもみられ，それをさらに凡その比率でみるならば，15世紀のものが7割，14世紀は1.5割，13世紀は1割，そして12世紀・16世紀及び近世以降のその他のものが0.5割であった。

これらのことから希少の12世紀のものと判断するものは，他に諸種品がみられないことから伝世されたものと捉えられ，また16世紀のものなどは極めて断片的であることなどから，本外のものと判断して差支えなく，したがって本遺跡は，14世紀後半から15世紀前半を中心にして盛行していたものと想定できる。加えていうならば，その発生期は供奉されたとみられる和鏡に記された永徳年間（1381～84）ごろではなかったかとみている。

さて，遺構であるが，土坑としたものが62基，柱穴状のものが118穴検出され，これらのほとんどは形態的，共伴性からみて中世期の掘立柱家屋，それらに伴う諸機能をもった遺構であったと想定される。しかし具体的構造物は判断できず，ただ柱間隔からみると，それは6尺6寸（約2ｍ）であったことが判断できたとともに，その柱列は北西－南東，北東－南西方向が窺われ，そこには該当期における鬼門などの災厄防御儀礼が働いた造りではないかと思われたのであった。

いずれにせよ，青磁・白磁などの秀品の外来陶磁器や鉄剣を携持し，また精錬技術をも習得していた可能性もある当住居者は唯者ではなく，おそらく本地区等における支配者クラスであったとみても間違いないと考える。本地区は，奥十二畠として国人の益田氏の勢力下に組込まれていた時期であったことを考えると，その傘下においての地侍（在地の有力農民）クラスの住居址であったのではないかと判断する。

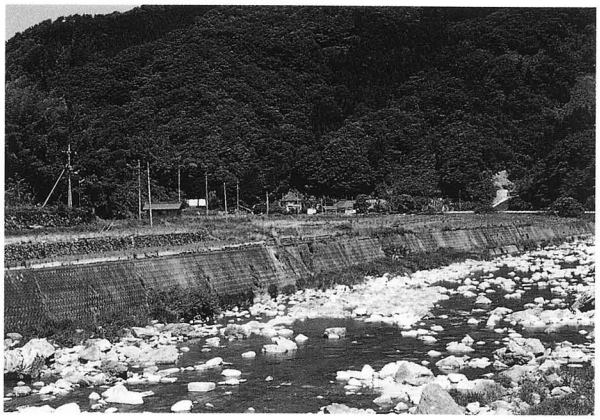
（渡辺友千代）

〔註1〕岩崎仁志『山口考古第17号』「防長地域の足鍋について」山口考古学会 1988年
岩崎仁志『山口考古第19号』「防長型擂鉢について」山口考古学会 1990年

鳥瞰する遺跡と周辺部

図版２

１．北側からみた遺跡の全景



２．匹見川から捉えた遺跡の全景（南東から）

３．北側からみた十字トレンチの発掘風景

４．A調査区の西壁（南東から）

５．A調査区の状況と北壁（南西から）

６．B調査区の北東壁（南から）

７．C調査区の東壁（北西から）

８．D調査区の南西・西壁（南東から）

1．土師器の出土状況

2．足鍋の出土状況

3．陶磁器の出土状況

4．打製石斧の出土状況

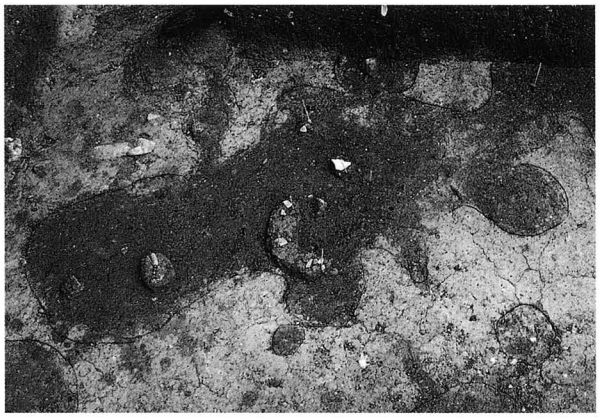
5．A調査区の遺構表出状況（北から）

6．焼土の顕著なSK02の表出状況（北から）

7．SK12の表出状況（北から）

8．SK13の表出状況（南から）

図版 4

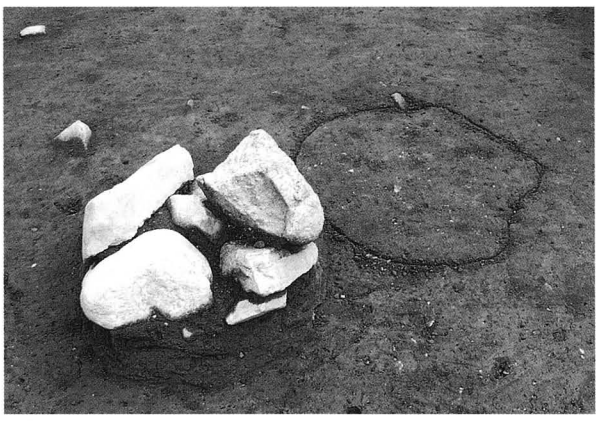


1．SK20の表出状況（北から）

2．B調査区の遺構表出状況（南から）

3．C調査区の遺構表出状況（北西から）

4．SK44・SK45の表出状況（北から）



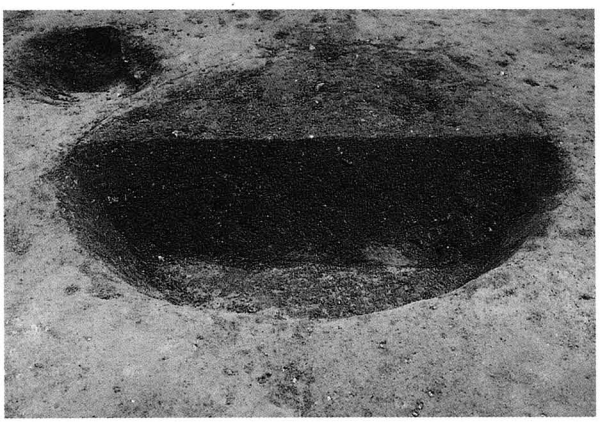
5．SK48の表出状況（北東から）

6．SK50の表出状況（西から）

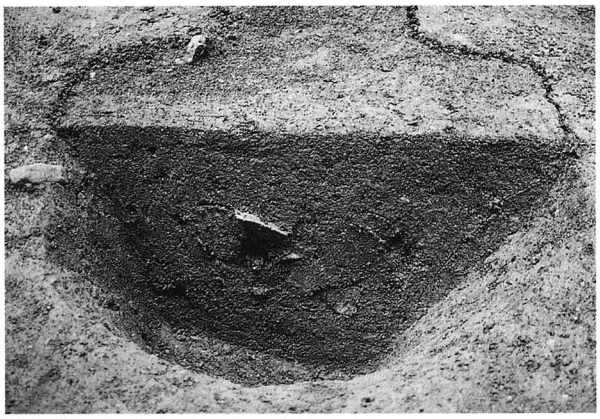
7．D調査区の遺構表出状況（北から）

8．SK58の表出状況（北から）

1．SK10の半截状況（北西から）



2．SK13の半截状況（北から）



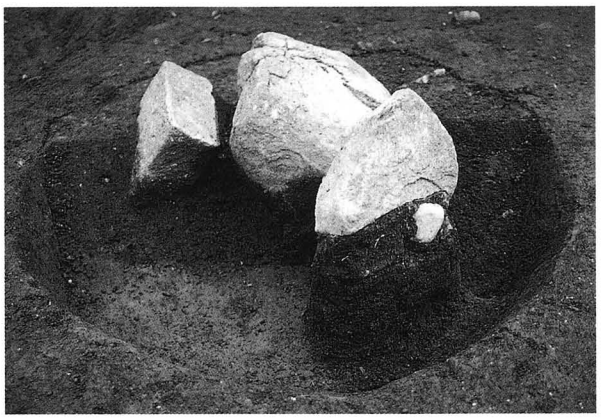
3．SK16の半截状況（北から）

4．SK20に検出された焼石（北から）

5．SK28・SK29の半截状況（北から）

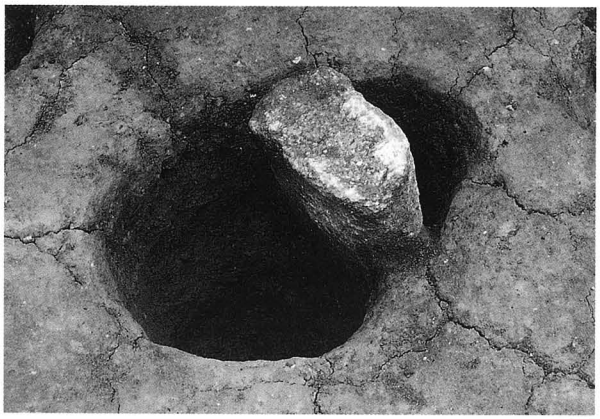
6．P68・P69の検出状況（北から）

7．SK48の半截状況（南東から）



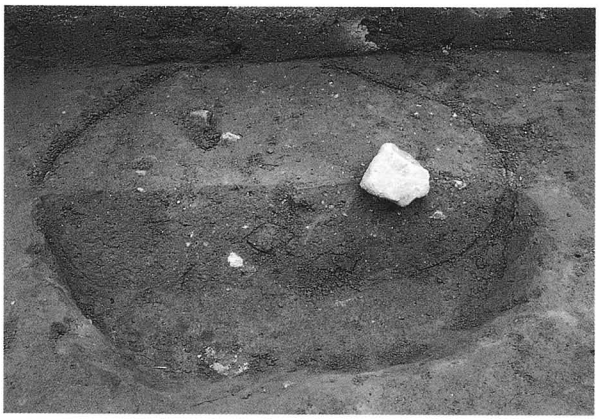
8．SK50の半截状況（北西から）

図版 6



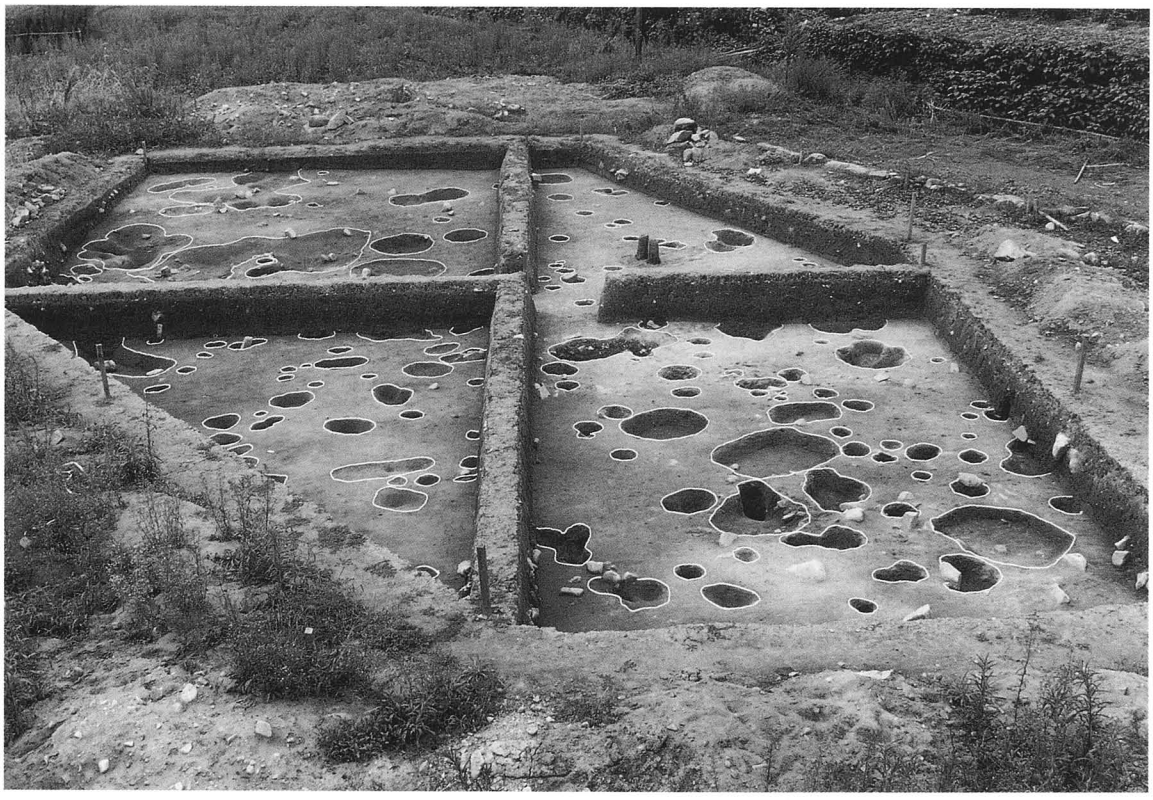
1．P96の検出状況（西から）

2．SK58の半截状況（南東から）

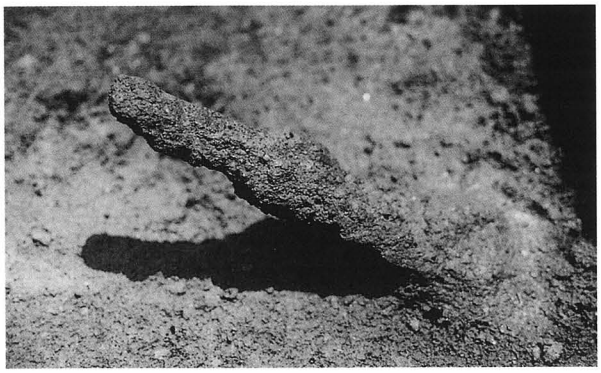


3．SK62の半截状況（西から）

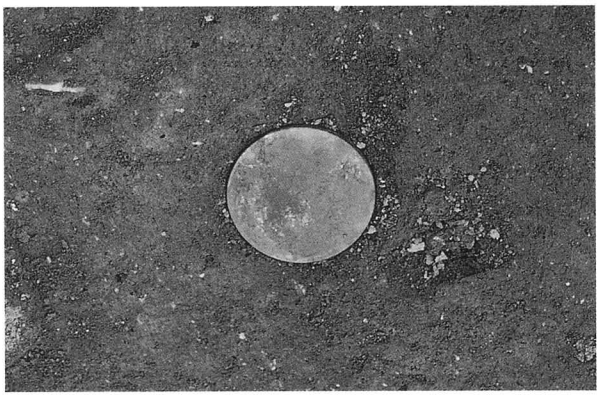
4．A調査区の遺構完掘状況（南から）



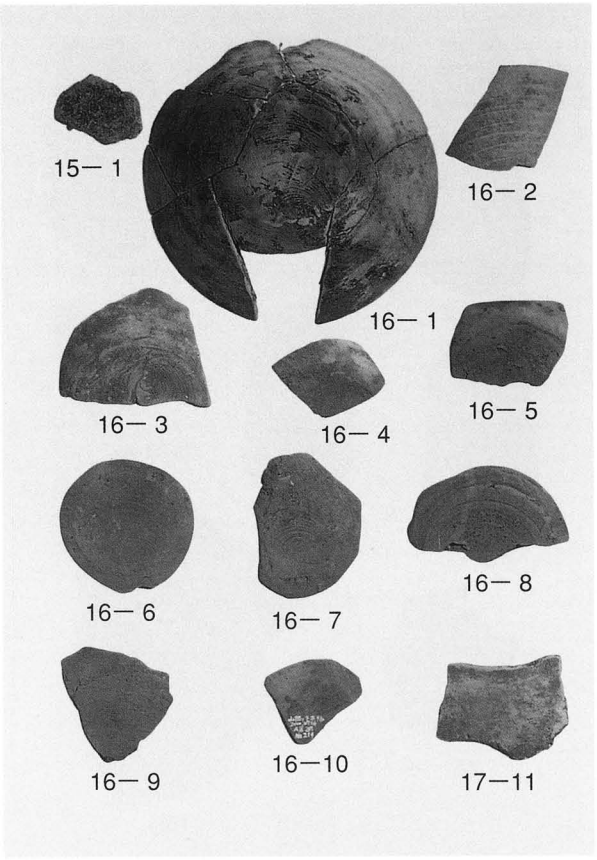
5．北からみたA・B・C・D調査区の遺構完掘状況



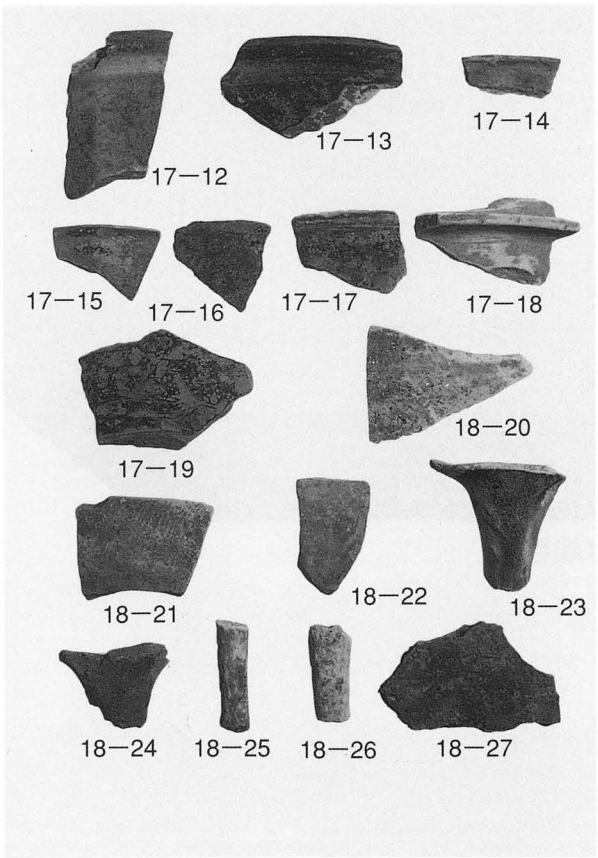
1．鉄剣の出土状況



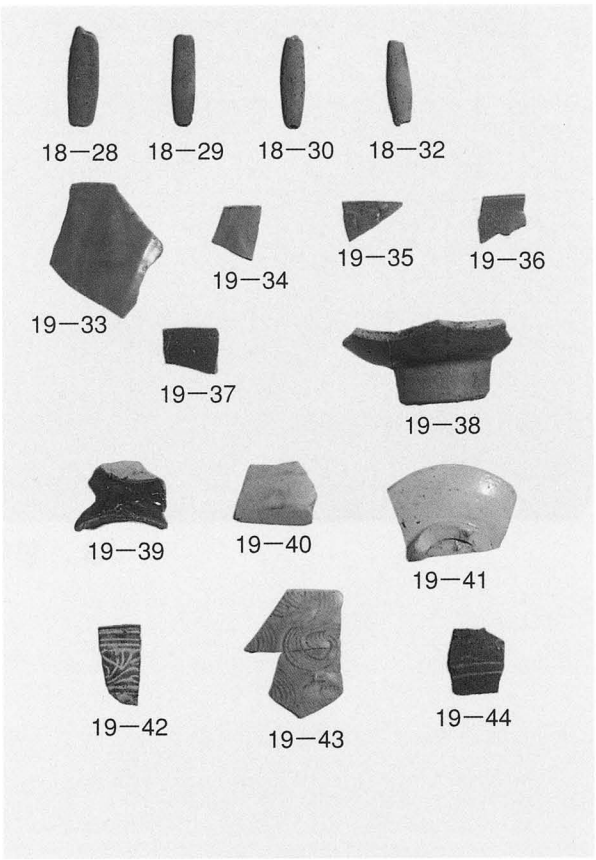
2．和鏡の出土状況



3．縄文土器・土師質類

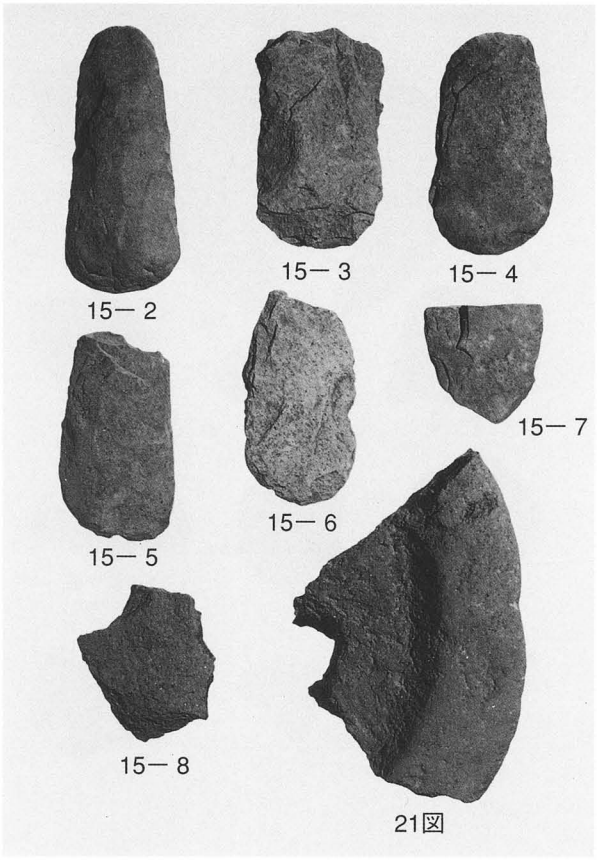


4．土師・瓦質・須恵質器類

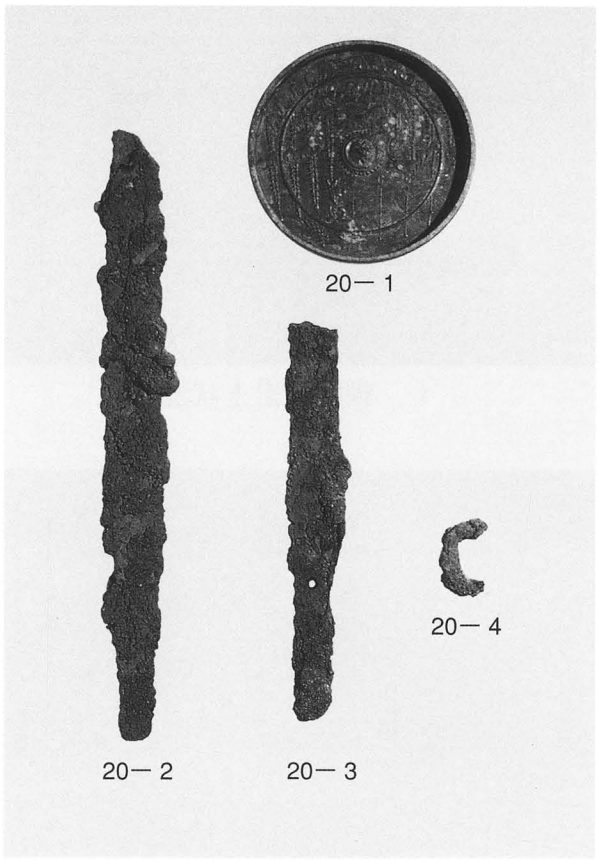


5．土錘・陶磁器類

図版 8



1．石　器　類



2．金属器類

3．鉄剣のX線写真

平成13年３月23日　印刷
平成13年３月30日　発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第34集

山根ノ下遺跡

発　行　　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見イ1260

印　刷　　株式会社　谷口印刷
島根県松江市東長江町902－59